
ふたつのしっぽは長くキラキラと。

あおぷー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつのしっぽは長くキラキラと。

【Nコード】

N1826X

【作者名】

あおぷー

【あらすじ】

ゼロ魔の二次です。

物語は現代に暮らしていた普通の少女が運悪く死亡し。

神様達のせいで待ちぼうけを。

そのお詫びになんとゼロ魔の世界に生まれ変わると言つか転生を！

さて、誰に転生するのでしょうかね？

ちなみに主人公が転生したキャラは少しだけ年齢が原作と異なりま
すのでご注意を。

1話 バス停で待ちぼうけ。(前書き)

内容改正したの投稿します。

他も順次改正して行きます。

1話 バス停で待ちぼうけ。

らー らー らー らーっ らー ことー ばがー
つわたらなーい！

はあ ひまです。

あ、初めましてこんにちは。

この駄文二次小説の主人公、葵鈴音と申します。

冬の足音が聴こえて来たこの時期をいかがお過ごしですか？

わたしは毎日バス停横のガードルの上に腰掛けながら毎日歌を歌っております。

あの、そんなイタい子を見る目をしないでくれませんか？

こっちにだって事情があつてこんな事をしているんですから。

ん？ おやおや、あちらから歩いて来るのはわたしの友達だった彩花ちゃんじゃありませんか。

その隣を歩いているのはサッカー部の　なんて名前でしたでしょうか？

んんんだめです思い出せません。

とりあえずついに彩花ちゃんにも春の季節が到来したみたいですね。

わたしに断りも無くオトコ作るとは　彩花死ね！　ってうそです。

いつまでも二人仲良くしてください。

しかし腕を組みながら目の前でイチャイチャとされると、何かこうムカツと来るものがありますね。

こいつらが二人一緒に写真撮る時にでも写り込んでやりましようか？
きつとわたしの姿を見たらテンションが一気にガクンと下がる事でしょう。

お？　朝の通学バスが来たようです。

頑張つて勉強して来るのよ〜行つてらっしゃ〜い、って
行つ
ちやいましたか。

あつ、ご、ご、ご、ごめんなさい、ついお友達だった女の子に気を取
られちゃいました。

どこまで話を あ、そうそう、事情でしたね事情。

えつと、実はここで半年程前に起きた交通事故に巻き込まれてわた
しは16年と言う短い生涯を終え。

今はこうやって幽霊となり、あの世からのお迎えと言つのを待つて
いるのですけど。

そのお迎えと言つのがどう言つわけか半年程たつても全然やつて来
ないんですよ。

ひまをつぶそうにもこの場所から半径50mくらいしか離れる事が
出来ませんし。

幽霊なので生きている人間と話す事も触れる事も無理と来まして。

このままでは発狂してしまうと毎日歌を歌って気を紛らわせているわけなんです。

しかし神様と言うのがいるならばもう少し死者の気持ちと言うのを考えて欲しいものですね。

自分が死んだ場所から離れられないばかりか。

お花とお水の捧げられる回数が日に日に減って行くの見てるの相当キツイものがあります。

はあ このままだとこの地縛霊にでもなりそうな予感がしてなりません。

迎えに来ないならこっちから行ってみましようか。

でも、わたしここから50mくらいしか離れられない ん？

そう言えば身体を浮かせる事出来るのに空を飛んだ事ありませんでしたね。

ひまつぶしをかねてやってみましょうか。

では、そうと決めたら早速、とーう！

おお〜見慣れた場所でも高いところから見ると違うものですね〜。

あ、あそこにあるのがわたしの家であっちが彩花ちゃんの家で、あれが学校ですね。

今日はここから夕日でも眺めて気を紛らわせましょう。

なんか身体が上に上にと引っ張られて行くんですけど。

あれ、ちょ、ちょっと、まさか星ですか？

このまま空高く舞い上がってわたしは星にでもなるんですか？

それはそれでいいかも、って、ふわああああああ！

いてっ！ いたたたた、なんで空で腰を打たなきゃ どこです

かここ？

なんか雲みたいなもやもやとした地面の上におっきな建物が立っているんですけど。

もしやここがあの世界？ え、じゃ、じゃあ死んだら迎えを待つんじゃないか。

こちらから行かなければならなかったとか？

は、半年もあの場所ですらい思いをしながら待っていたわたしって。

ま、まあ、とりあえず建物の中に入ってみましょうか。

扉が開けっ放しとは無用心ですね、おじやましますよ。

あ、死者のみなさん受付はこちらって壁に書いてありますけど。

その受付に誰もいないと言つのはどう言つ事なんでしょう？

誰かいませんかー半年程遅れてやって来た死者がここにいるのですけどー。

どうやらこのフロアには誰もいないようです。

はあ、そこから歩き回っていればいずれ誰かに会うでしょうからうろろしてみますか。

しかし大きな建物ですねーへ々な大型デパートより広いですよこれは。

ん？ 人の声が聞こえた気が　　あ、また、これは間違いなく人の声です。

こっちの方から聞こえて来てるようで　　。

あ、どうやらあのドアの向こうからですね。

「はあ　誰が司会やってもいいけど羞○心はどうなるのよ。

野○保ファンからするとそっちの方が心配なのよね。」

なにかとても俗っぽい内容の音が聞こえて来たんですけど。

「ここ、現世じゃありませんよね？」

と、とりあえずやっと人に会えそうなのでノックをコンコンっと。

「失礼します。」

「あゝまだ休憩中よ、報告なら休憩時間が終わってから あん
た誰よ？」

ドアを開けてみるとそこに居たのは高級そうな杖に週刊誌を広げてる妙齢の女性でした。

髪の毛の色と瞳の色からすると外人さんですね。

「えっと、半年程前に死んだ死者の葵鈴音と言つたものです。」

「はあ？ 今なんて言った？ 半年前の死者つて言った？」

なんかすごい驚いているんですけど。

「そ、そうですけど。」

「あんた迎えから逃げ回ってたんじゃないでしょうね！」

「そ、そんな事してません。」

「じゃあ、なんで死んでから半年もかかってやって来たのよ？」

「いや、いい、あんたちよつと机の前に立て！」

「はあ 二つですか。」

「今からあなたの頭の中を覗くからそのまま動かないで、いいわね。」

「

頭の中を覗くつて、い、いつの間にそんな大きい杖を手にしたんですか？

ちよ、ちよつと、まさかそれで頭を叩く気じゃ！

「いたっ！」

「こら動くな！ ええと、なにになに あ、あいつらあああ！
ナメくさった事をしおつてからに！」

えらい怒ってるんですけどこの人。

「はあああ　　もっいいわよ。」

「は、はあ。」

「　　悪かったわね、一応あいつらの上司として謝っておくわ。」

「は？」

「あいつらにはしっかりと制裁を加えておくから。」

「あ、あの話がよくわからないんですけど。」

「あ？　ああ、身内の恥を晒すようであんまり言いたくないのだけ
ど。」

あんた被害者だから特別に教えてあげるわ。

あんたはね、魂回収班の奴らがサボったせいでここに来るのが半年
も遅れたのよ。」

「ひ、ひどっ！」

「悪かったわ、自分が死んだ場所に括りつけられたまま半年もほっ
たらかしにしちゃって。」

その間に相当辛い思いしてたみたいだし。

生まれ変わるにしてもこの天界に住むにしてもそれなりの優遇はさ
せてもらっわ。」

「生まれ変わりに天界に住むですか？」

「そう、あなた善人って言うか無害の部類に入る人間だからここに
住む資格あるわよ。」

む、無害ですか 微妙な位置にいるんですね。

「は、はあ、あのその前にお姉さんはいったい誰なんですか？」

「あたし？ あたしは神よ。」

「。。。」

「なによその信用出来ないって顔は？」

「え、いや、そんな事はないです！」

「証拠見せてやりましょうか証拠を。」

「証拠ですか？」

「そう、葵鈴音、性別女 享年16歳。

死因は大型トラックの群れに轢かれてって悲惨ね。」

性格はやや内向的で家族構成は父親母親と四歳離れた兄との四人暮らし。

身長は152センチに39キロって痩せ過ぎは身体に悪いわよ。

スリーサイズはB77/W54/H76って、ぷっ。

悩みは成長期なのに1年前と胸のサイズがぜんぜ「わかりましたー！

神様って信じますから！ それ以上は言っちゃだめー！」あら、そ
うっ？」

い、いいいいきなし、ななななにを暴露しやがりますかこんにゃろ
うわ！

それも、ぷっ！ って笑いやがりましたね！

「ほれ、これが頂きと言うものだ。」

くうううーっ！ 目に入らないようにしていたのをこれみよがしに
ゆさゆさとおおおー！ もう許さん！

「悪魔はどこだーっ！ いるなら出てこーい！

コイツをぶちのめす力をくれるなら魂でもなんでもくれてやるから。

さっさと出てきやがれえええー！」

「ちよ、ちよつとなにを物騒な事を叫んでいるのよ！」

「やかましい！ おまえに持たざる者の恨みと言つものを思い知らせてやる！」

サターン！ ルシファー！ この際八エの王でもいいからさつさと出てこー、もがもが。

「そ、それ以上叫んじゃだめ！ あいつらおもしろ半分でマジで来そうだから！」

「むー！ むー！」

「悪かったわ！ 悪かったから！」

「むむーむー！ むむむーむー！」

「あ、あなたの望む願望を実現出来る機会をあげるからそれで手を打ちましょ！ ねっ！ ねっ！」

「む。む。」

「どう？ 取引成立でいいわね？」

「むう。」

首を上下にコクコクと。

「なら手を離すから物騒なことを口にしちゃだめよ。」

「約束破ったらどうなるかわかっているでしょうね、神様。」

「わかっているわよ、まったく神が人間に脅されるなんて悪夢だわ。」

「人の触れてはいけないところに触れたからです。」

「はあくまあ、確かにあたしも悪のりし過ぎたわ。」

「それでどうするの?」

「死んでからも歳を、あ、いや、身体は成長するんでしょうか?」

「それはないわ。」

「そうですか。」

「となるところの大きさのままとなら次の人生こそ持てる側の人間に!」

「生まれ変わりをお願いします。」

「わかったわ、じゃあこれ書いて。」

またどっから紙とペンを取り出し　まあ、神様だからなんでもあり
なんでしょう。

「えっと、これは？」

「願望アンケートよ、それ見てからあなたの送り先と器を決めるか
ら。」

ああ、なるほど、ではでは真面目に書かなければ。

「わかりまし、それじゃ書きます。」

えっと、？番、お金はあった方が、まあ、あったに越したことはな
いですから。

？番、地位は高い方がいいか、それなりでいいです。

？番、髪色は、今が黒だから別なのがいいですね、とりあえず変な
色でなければ、っと。

ふう、このアンケート結構細かいですね。

えつと次は
。

「終わりました。」

「どれどれ ふんふん、なるほど ぷっ！ 夢見るお姫さまじゃないんだから！」

「な、なんですか！ ちょっとくらい夢を見たっていいじゃないですか！」

「だからって、理想男性像は女の子に暴力振るわない、優しくしてくれる。」

例えば剣1本でも命を懸けて護ってくれる、でも普段は可愛い系の人って。」

「あーもう！ だめなら書き直しますから返してください！」

「いいわ、いいわ、じゃあ、これでいいのね？」

「むー、そうですねけど何か！」

「なんにもーさて、今回はこっちが迷惑かけて辛い思いさせてるからこれに色を付けておくわね。」

「色？」

「また簡単に死にたくないでしょ。」

「そ、それはまあ。」

「だから生きる為の力と言つのを強化しとくから。」

「あ、ありがとうございます。」

「それじゃいくわよ。」

我の名はロキ、我命ずる、この者が望む世界へのゲートよ開け！」

おお！目の前に大きな鏡が！

ん？ ロキ？ それって確か悪戯をする神様だったような。

「そしてその者が望む新たな世界へと導け！」

え あ ちょ、ちょっと身体が鏡の中に引っ張られて。

「よし、久しぶりにまともな神術を使ったけど上手く行った

わ。
「

ひ、久しぶりにまともな神術って。

「それじゃ新しい世界で頑張るのよ〜ちゃんと繋がっているはずだから たぶん。」

い、今たぶんって言いましたよね！ 絶対言いましたよね！

「じゃあね。」

ちょ、ちょっと背中を押さないでください！

「ほら、理想の王子がいるかも知れない世界にはよ行け。」

いたっ！ 背中を蹴らないでって、吸い込まれる！ いやあああああああああああ。

2話 辞書をひけ(前書き)

改正しました。

2話 辞書をひけ

無害な生物なはずなのに死んでからも酷い目にあうなんて。

前世のわたしは余程運が無かったのでしょうか。

それにしてもここはどこなのでしょう？

真っ暗だけどとても温かくてドクン、ドクンっと音が聴こえて来ます。

なんでしょう、まるでお母さんの胸に抱かれているみたいで眠くなつて来てしまいました。

お母さんか。

わたしの遺体を見てから体調を崩してずっと寝込んでいるって。

バス停にいた時に友達たちが話していたけど大丈夫かな。

お母さん お母さんに忘れられるのは悲しいけれど。

わたしの事を忘れて楽になれるなら忘れていいんだからね。

あれ、急にどうしたのでしょうか？

身体が圧迫されて、く、苦しい。

狭い、狭いよ、苦しいよ。

声？ 人の声？ 苦しんでる声？

さ、寒い、寒いよ。

うっ、息が出来ない。

し、死ぬ、死んじゃう、誰か助けて。

嫌、また死にたく無い。

まだ何もしていないのに死にたく無い。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、いやだいやだいやだいやだいやだいやああああ
あああ！

「おぎゃあ！おぎゃあ！おぎゃあ！」

「産まれた！産まれたましたわ！元気な女の子の赤ちゃんが産
まれましたわ！奥様！」

「そう、良かった。」

早くあの人を呼んで来てちょうだい。

私達の可愛い赤ちゃんに早く名前を付けてあげたいの。」

「はい、今すぐにお呼びいたしてまいります！」

この日、わたしは新しい世界で生を受けました。

そして私の新しい名前。

この世界での私の名前は。

ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ。

どこかで聞いた事がある名前なのが少し不安な生後間もない私でした。

この日から数年後。

みなさま、こんにちは。

葵鈴音ことベアトリスです。

わたくしがこの世界に生まれてから早くも二年が過ぎてしまいました。

みなさまはお変わりありませんか？

わたくしはそうですねえ。

『おほほほ。』

とか。

『嫌ですわ奥さまったら。』

とか。

『わたくしの言うことが聞けぬと言うのですかあなた！』

とか、どこの中世貴族様ですか言葉が四六時中耳に入って来て口調がおかしくなって来ました。

いえ、おかしくと言うより書き換えられてると言うのが正しいのかも知れません。

なんでも産まれてから7歳くらいまでが言語を1番覚える期間だそうですから。

今も、ものすごく勢いでわたくしの頭の中は書き換えられているのかも。

そ そう考えると、ちょ ちよつと怖いものがありますね。

ま、まあ、そこは余り考えないようにして。

えっと、わたくしの名前で既に賢みなみなさま方はお察しかと思われませんが。

あえて言います、あの悪戯神様やってくれました。

わたくしはなんとゼロの使い魔の世界に転生してしまったのです。

またあの神様にお会いする機会がありましたら。

あ・な・た・は生まれ変わりと転生の意味もわからないのですかダメ神め！

と、目の前に正座させて小一時間程お説教をしてやりたいです。

はあ、確かに兄の部屋で何気なくゼロ魔を読んでいた時に。

ルイズさんみたくお姫様だっこをされてみたいとか。

好きな女の子の為に1対7万って才人カツコイイとか思って。

生まれ変われるとしたらこんな世界がいいなあ。

と、思った事があるような気がしますけど。

それはわたくしが今よりもっと小娘だった時の話です。

それなのに、それなのに、あの悪戯神様め！

だいたいベアトリスって持たざる者の全ての敵ティファニアさんをお

ベアトリス、グッジョブです。

それにしてもこんな事になるならもうすこしゼロ魔をよく読んでおけばよかったです。

そうだ、記憶が薄れない内にメモっておきましょう。

あやふやな知識でも役に立つかも知れませんかね。

文字は見られても大丈夫なように日本語でカキカキと。

え〜と、確かこの大陸の名前はハルケギニアで。

実際のヨーロッパ大陸をモデルにしているんですよ。

で、大きな国はトリステイン、ガリア、アルビオン、ロマリア、ゲルマニア？

それで、確かアルビオンでクーデターが起きてウエールズさんが死んでから。

神聖とか新生とかアルビオンがトリステインに攻めて来て撃退され。

今度はトリステインとゲルマニアの連合軍がアルビオンを攻める、でしたっけ？

それからなんか色々とあってティファニアさんを才人さん達が魔法学院に連れて来たんですよ。

そこでわたくしことベアトリスが、おーほっほっほっ、みたいなノリでティファニアさんをイジメたら。

わたくしが逆に泣かされて仲直りをした、でしたっけ？

うん、いまいちと言つか全然自信がありません。

こんなの書いても役に立ちますかね？

まあ、とりあえず魔法学院に留学するまでは特になにも無いでしょうから。

それまでは平和を満喫しつつ不測な事態で簡単に死なないように、
つて。

難しくても当然いやですけど、備えて。

万が一の時はルイズさんや才人さん達に助けてもらっちゃいましょう。

他力本願って思われるかも知れませんが。

わたくしみたいなイレギュラーなのが活躍したらみなさんも面白くないでしょうし。

それにわたくしまたあんな思いをするのいやです。

「姫さま、姫さまはどこらにいらっしゃいますか？」

あ、ごめんなさいわたくしを呼んでるみたいなので。

「なに用ですか？」

「あ、姫さま、公后さまがお呼びになっておられます。」

「わかりました、すぐに行くとお伝えしてください。」

「かしこまりました。」

「さて、お母さまのところに行かなくては。」

ん？ な、なんですか、みなさまのわたくしを見るその目は？

さ、三歳時らしく無い、と？

そ、それは自分でもよくわかっております。

でもですよ、愛情をいっぱい注いでくれる両親が。

『早くお前の可愛い声を聞かせておくれ。』

とか。

『ベアトリス、お前のお母さまですよ、早くお母さまってわたくしを呼ぶのですよ。』

とか、毎日毎日言われ続けたら諦めて、じゃありませんでした。

期待に应えてしまいたくありませんか？

ええ、そうですね、わたくしはその期待に应えてしまってペラペラとよく喋り。

調子に乗ってもっと喜ばせてあげようと読み書きまでしてしまったんです。

おのおかげで不相応にも神童とか呼ばれるまでになってしまった。

はあ 今さら年相応に。

「おとうじやまあ、おかあじやまあ、いっちょにあそびまぢよう。」

とか言っても無駄でしょうね。

いや、無駄ばかりか、私になにか起きたのでは無いかとあのお父さまの事です。

クルデンホルフ中の水のメイジを集めて私を治療させようとするかも知れせんし。

お母さまは、わたくしの育て方が、と歎き悲しまれるかも知れせん。

はあ 自分で自分の首を絞めてわたくしはなにをやっているのでしょうかね。

あ、そろそろお母さまのところに行かなくてはなりませんので。

それではみなさまごきげんよう。

3話 空を飛びました。(前書き)

改正いたしました。

想像力が豊かな方は見ない方がよいかと一応警告をしておきます。

ちなみに一部史実でございます。

うう プルプルこわい。

3話 空を飛びました。

みなさま、ごきげんよう。

今日も空に浮かぶ双月がとても綺麗です。

もう見慣れてしまいましたけど月が二つもあると言つのは不思議な感じがいたしますね。

どちらかのお月様にウサギさんはおりますのでしょうか？

なんでもありみたいの世界ですからいてもおかしく無い気がしてならないです。

まあ、それはよいとして。

わたくしことベアトリスは晴れて6歳になりました。

成長早過ぎですか？

でも3歳〜6歳までの間の事を聞いても面白く無いですよ。

それでも構わまいと言うのならはお話いたしますけど？

そうですね構わないですか。

コホン、それではお話しさせていただきます。

以前、周囲から神童と呼ばれるようになってしまった、と。

お話したのを覚えておられますか？

案の定、自分の首をキリキリと絞める結果になってしまいました。

両親が専属の家庭教師の数をこれでもかと言っくらい増やしてしま
ったのです。

みなさまは朝から番まで勉強漬けの日々を想像出来ますか？

夜眠っていても文字や数字が追いかけて来るのですよ。

そして若干6歳にして胃のあたりがシクシクと痛むのです。

いったいこれはなんて幼児虐待なのでしょう。

はあ 今度侍女さんをお願いして良い胃薬を探して来てもらいましょう。

あ、そうそう。

この世界に生まれて良かったとしみじみと思えた事が先日ありました。

それは、ものは試しにとやってみたらなんとあっさりと杖との契約を交わす事が出来て。

もしかして魔法も使えるとか？ と見よう見真似で。

『光よ光よ光よ！ ライトー！』

と、唱えてみたらピカーっと光が出たではありませんか！

あの時の感動と言ったらそれはもう　ふふ、ふふふふ　あ、いけない涎が。

コホン、えっと、みなさまも機会がございましたら是非とも魔法を使ってみてくださいね。

一度やったらもう病み付きになる事間違いないですよ。

あ、そうそう、魔法と言えばあの悪戯神様、最低限の仕事はだけはしっかりとやっていたみたいです。

わたくしが魔法を使えると言ったお父さまが魔法の家庭教師の先生を付けてくれました。

その先生がある日、人の事を変な物を見るような目で。

『この子は異常だ！　常識では考えられない速度で上達している！』

と、言い出したのです。

どうやら悪戯神様が言っていた生きる為の力の強化と言ったのは魔法

の事だったみたいです。

ちなみにその後その家庭教師の先生はお父様にどこかに連れられて行ってしまい。

次の日には別な家庭教師の先生がやって来ました。

まあ、自分の常識が世の中の常識と思われているような先生でしたから別にいいんですけどね。

ちなみに今日はこれから浮遊魔法を習いますので。

近い内に空を飛べるのも夢ではありませんね。

その時は魔法使いらしく箒に乗って飛ぶ
あはあくリアル魔女
っ娘ではないですか。

想像しただけでまたもや涎が出て、ゴシゴシと。

えっと、どこまで話しましたでしょうか？

あ、そうですね。

それでもまあ、毎日勉強漬けの生活を送ってる訳なのですよ。

しかも近々また一流の淑女になる為の家庭教師の先生が来るとか。

はあ 仕方ない事とは言え正直言つと面倒でなりません。

わがままかも知れませんが大公国の姫とか大貴族の家とかには産まれるものではありませんね。

もっとのんびりとした家風の平凡な貴族の家がよかったです。

あ、そうですね。

子供は大人より自由に見えて実は色々な物に縛られているものですよ。

世の大人のみなさま。

もう少し子供に自由な時間を与えてあげてくださいね。

いち転生者からのお願いでした。

「姫さま、姫さまー。」

あ、いけないそろそろ魔法のお勉強の時間です。

それではみな様方ごきげんよう。

数日後。

「ベアトリスよ、もうすぐ水メイジが来るからそれまでの辛抱だぞ。」

「怪我は頭にたんこぶが出来ただけなの？ 傷はない？ 気持ち悪くない？」

「これくらい大袈裟ですよお父さま、お母さま。」

「」「いけません！」

「は、はい。」

やっけてしまいました。

浮遊魔法を使えるようになったので試しにと空を飛んでみたらそれはもう気持ちよくて。

つい。

『急降下〜そして、それ〜!』

と、木の枝の下を潜ろうとしたら頭をぶつけてしまいました。

幸い覚えたての魔法でしたので高さも速度もかなり制限してましたから。

おでこにたんこぶが出来たくらいで済みました。

ちなみに例えば敵を後ろから羽交い締めにして。

『レビテーション』

と、空高く舞い上がり、そしてくるんつと反転して。

『墜ちろーっ!』

と、言う掛け声とあげながら急降下をし、地面すれすれで自分だけ離脱。

そして敵は地面に頭からどっかーん!っとなる訳なのですが。

これを食らったら驚異の回復力を持つ才人さんでも耐えられないと思うのですけれど。

どうでしょう??

あ、真面目に考えないでくださいね。

もしかしたら頭をぶつけておかしな事を口走ってるだけかも知れませんが、
せんで。

「おっ、おおお待たせいたして申し訳ございません!」

「遅いわあ！ さつさとベアトリスの治療に取り掛からんか！

我が愛しのベアトリスの治療に失敗したら貴様の命は無いと思え！

いや、貴様の一族郎党皆殺しだ！ いいな！」

「はっ、はいiiiiiiiiiiii！」

お父さま、わたくしをそこまで大事に思ってくださいるのは嬉しいのですが。

脅しが効き過ぎて水のメイジさんの手が振るえまくってしまってますよ。

あれでは例え水のスクウェアメイジでもまともな治療は出来ないかと。

しかし白衣を着た震える手を見ていると。

わ わたくしの前世のトラウマがまざまざと思い出されて。

あ あれは忘れもしない小学校4年生の冬。

インフルエンザに罹ったわたくしは近くの個人病院に行き。

さしたる待ち時間もなく診察室に通されると。

そこには何故か数年前に引退したはずのおじいちゃん先生が椅子に座っている姿が。

そしておじいちゃん先生は。

『あゝインフルエンザだね、婦長さん、あれ持って来て。』

そして婦長さんからおじいちゃん先生に手渡されたのは一本の注射器。

そしておじいちゃん先生はそれを震えた手で。

『今から注射するからね、痛くないからね。』

と、言いながらわたくしの腕に突き刺そうと徐々に近付けてくる。

わい。

お、お母さま、お母さまああ！ うわああああああ！

「おお、よしよし、可哀相にベアトリス。」

「お、お父さまの胸も空いているんだぞ、ベアトリスや。」

「あなた！」

「むっ むう。」

まさか、この世界でも母親の胸でマジ泣きをする事になるとは思いもよりませんでした。

恐るべし負の遺産、うう 注射器こわい。

4話 主の勤め。(前書き)

かいせうしました。

上には上の、下には下の苦勞があるんです。

では真ん中の人は何？

4話 主の勤め。

みなさま、ごきげんよう。

ベアトリス、10歳になり独り立ちいたしました。

と、言っても生活とかの面ではありませんよ、魔法です魔法。

先日、魔法の家庭教師の先生方から。

『もう、わたくしどもが姫さまにお教えする事がございません。』

と、免許皆伝をいただいていたのです。

それにしても齡10歳にして火、水、風、土の4系統魔法及びコモ
ンマジックの全てを習得してしまうなんて。

自分の事とは言え呆れ返ってしまいます。

あの悪戯神様は加減と言うものをどつやらご存知ではないようです。

しかし、これはもうトリスティンの魔法学院に留学しなくてもよいのではないのでしょうか？

まあ、こればかりはお父様が決められる事なので。

わたくしがあれこれと考えても仕方ありませんね。

でも、魔法学院には通ってみたいのです。

それは何故かと申しますと。

公女と言う立場の上に魔法の天才と言う大層なレツテルをいつの間にか貼られてしまい。

そのせいでみなさんから腫れ物扱いされているので。

わたくし友達と呼べる相手が一人もいないのです。

はあ 魔法学院に通える歳まで後5年ですか。

長いですよね5年って歳月は。

あ、ごめんなさい、ついグチを言っしまいました。

えっと、それですね。

魔法の授業が終わってしまいましたので。

これからはその空いた時間に自分なりの創作と言いますか。

独自で魔法の技術を昇華させて行こうと思っております。

お父さまにお願いしてこの世界各地に眠っているやも知れない魔法の文献や。

貴重な書物を取り寄せているところなのです。

上手く行きましたらいずれみなさまの前でご披露させていただきますね。

あら？ ノックの音？

誰か私の部屋に来たようですね。

夕食にはまだ早い時間ですしなに用でしょうか？

「どうぞ〜。」

「失礼いたします。」

大后様が姫さまをお部屋にお呼びになられておられます。」

「なに用かしら？」

「はい、なんでも次の晩餐会のお話をされたいとかだそうです。」

「そう、ではまいりますか。」

そうして私は侍女を伴いお城の廊下を歩いていると。

「この花瓶がいったいなんエキューすると思っっているのだ！」

なにやら男の人の怒鳴り声が聞こえて来ましたので。

わたくしはその声が気になり声のする方へ歩いて行くと。

「うわあ、あの貴族に目をつけられるなんてあの子も運悪いわね。」

「わたしも前に同じように怒鳴られた事あるけど、終わるまでへたすりゃ半日はかかるわよ。」

廊下の曲がり角から先を覗いている侍女さん達の後ろ姿が見えました。

どうやら先程から聞こえて来る怒鳴り声はあの曲がり角の先から聞こえて来ているようですな。

なにがあったのかちょっと尋ねてみましょう。

「あなた達、ここでなにをしているの?」

「なにつて、貴族様に八つ当たりされているあの子の事をここから心配しているのよ。」

む、人と話す時にお尻をこちらに向けたままはお行儀よくありませんね。

まあ、それより今は八つ当たりと言う方が気になるので。

「八つ当たりなら怒鳴っている方に非があるのに、なのに何故止めに入らないの？」

「ば、ばか言わないでよ！　いくら相手に非があったとしても相手は貴族様よ貴族様！」

ばかとは失礼ですね、ばか言う方がばかなんですよ！

「そうよ、いくら相手がわざとあの子を転ばせて運んでいた花瓶にひびを入れさせたからって。」

わたし達平民が貴族様に文句を言える訳がないじゃない！」

原作でギーシュさんも香水の事で言い掛かりを付けてましたけど。

この世界はあんな理不尽な行いが貴族と平民との間で当たり前のように行われている世界でした。

このまま見過ごすのも後味が悪いですし。

理不尽な言い掛かりを付けている人は嫌いなので止めさせますか。

さて、相手はプライドの塊と言ってよい貴族。

どう上手く場を収めたものか。

そうですね、わたくしの立場を使い怒鳴られているあの侍女さん
を呼ん。

「死ね！ 貴様など死んでしまえ！」

「申し訳ございません、どうぞお許しを。」

「いや、許せん！ これは姫さまのお部屋に飾る花瓶だと言っ
いたな貴様！」

「は、はい。」

「ならばこの花瓶を傷を付けたは姫さまに傷を付けたも同じ事！
この罪、どう償う！」

「そ、それは、いつ、一生かけても弁償させて。」

「はっ！ 弁償と来たか、貴様が一生稼いだとてこの花瓶のかけらすら手が届かぬわ！」

貴様の変わりなどいくらでもおるのだ！ 死んで償え！」

あの男、また言いましたね。

「ちょ、ちょっと、ヤバいんじゃないの？」

「ど、どどどどうしよう。」

と、慌てふためく侍女達にわたくしは。

「あなた達、そこをどきなさい。」

「はあ？ まさかあんた止めに入るつもりじゃないわよね？」

「やめなさい、そんな事したらあなたまでヤバい事になるわよ！」

「ふう その方ら、いつまで主に背を向けて口を利くつもりか！」

「」「」「？」

侍女達が恐る恐る振り返ると。

「「べっ、べべべべべアトリスさま！」」

「もう一度言う、そこをどきなさい。」

「「はっ、はひー！」」

勢いよく飛びのく侍女達を横目にわたくしは。

身体を震わせながら平身低頭している侍女の傍へツカツカと歩いて
行くと。

怒鳴っていた貴族の男がこちらに気づき。

この者が大事な花瓶を、とか、わたくしからも怒って、とか、言っ
ているようですが。

そんなものは無視です無視！

「あなた、顔を上げなさい。」

「あ、あの私、だ、大事な花瓶を傷付けてしまい」

こんなに顔を泣き腫らせてしまって かわいそうに

さて この貴族の男、たしか名前は 忘れましたが爵位は男爵だったはず。

「あなたが謝る事はないわ、そうでしょ、男爵？」

そう言いながらわたくしがキツと睨むと男爵は顔を青ざめさせ。

「ひ、姫さま、お、おっしゃられている言葉の意味が。」

「あら？ シラを切るつもりなのかしら？」

「し、シラと言われましてもなんの事やら。」

その態度を見てわたくしは両手を腰に当て胸を張り。

原作でもベアトリスがやっていた、そうですね ツン系女子が偉ぶるときによくやるあのポーズです。

何故なのかは知りませんが、わたくしが怒る時とかは決まってる格好をしてしまうのです。

私の中のベアトリス成分がそうさせるのでしょうか？ 謎です。

「わたくしね 見ていたのよ、あなたが彼女に足をかけてわざと転ばせたところをね。」

「そ、そんなはずは！ ちゃんと周りを確認してから はっ！」

あっさりと語るに落ちましたこの男爵。

「へえ、いつもそうやっていたのね。」

「そ、その。」

さて、息を大きく、すう〜と吸って。

「主が財産を己が憂さを晴らす為に利用するとは何事か！

ましてやその悪事が主の知るところとなったと言つて罪を認めるところか。

シラを切るうとするとは、それでもその方はクルデンホルフの貴族か！

この罪、決して許されるものではないぞ！

その方こそ己が命を持って罪を償うがよい！」

「。」「

おや？ この人ボロボロと泣き出してしまいました。

泣き落としをししようとしてもその手には乗りませんよ。

あなたは今まで立場や権力を笠に着て悪事を働いていたのですから。

然るべき罪を償うは当然の事！

ましてや、たかが花瓶一つで人に命を断ると口にするは絶対に許しません！

あなたに死の辛さがわかりますか！

あなたに死にたくなくても死んでしまった者の気持ちがわかりますか！

あなたにわたくしの気持ちがわかりますか！

あなたにわたくしがどれ程あの場所で辛い思いをしたかわかりますか！

あなたに！ あなたに、あなたに。

「姫さま。」

そんな心配そうな顔をしなくても大丈夫ですよ侍女さん。

わたくしが来たからにはもう大丈夫ですから。

あれ？ なにか頬を 涙？ わたくしは泣いているの？

もしかしなくても侍女さんが心配しているのは、わたくし？

助けに来て心配されるとは、わたくしはなにをやっているん

でしょう。

ふう　　でも、そのおかげか頭に上がっていた血が下がったみたいです。

命を持って償えと言うのは言い過ぎました、取り消しましょう。

さて、この場はどう収めたものか。

花瓶なんて惜しくもありませんけど。

主の所有物を部下の私欲に利用されたままお咎め無しと言うのは沽券に関わりますし。

かと言って余り厳しい処罰を下すと。

『たかが平民一人の為に、我ら貴族が罪に問われるとは何事か！』

と、わたくしに物を言えない貴族達がこの侍女に嫌がらせをする危険も。

うん、どうしましょう。

八つ当たりの罪は本人が侍女達に謝罪するとしても。

主の所有物を私欲の為に利用し傷付けた罪は。

ヒビが入った花瓶 ですか。

そうだ、これなら！

「花瓶をこれへ。」

「は、はい。」

侍女さんから花瓶を受け取り顔の前まで持ち上げてから手を放すと。

「「あつ！」」

当然、花瓶は重力に引かれて床へと落ちてカシャーンと音を立てて割れてしまいました。

「」。」「」

な、なんですかあなた達のわたくしを見るその目は！

これは怒り心頭で暴れ出したとかじゃありませんからね！

さて、後はわたくしの意図を上手く察してくれればよいのですが。

「この花瓶はベアトリスが手を滑らせて割ってしまいました、いいですね？」

「」。」「」

む、無言ですか では、もう一回言います。

「この花瓶はベアトリスが手を！ 滑らせて割ってしまいました！
いいですね！」

「 は、はい、ありがとうございます。」

よし、侍女さんは察してくれました。

でも、ありがとうは言っちゃだめですよ。

さて、残るは。

「はっ、ははぁーっ！　ベアトリス様のご恩情、ありがたき
幸せに！」

ふう、なんとか察してくれましたか。

「こたびだけですよ、しかし花瓶が割れてしまったと言ってすべての
罪が消えたわけでは。」

「はっ！　わたしが今まで迷惑をかけた者達に詫びをば！」

おお、今回は話が早い。

さて、この処置のしかたで侍女さんに不満は。

うん、表情とか雰囲気判断する限りどうやらなさそうですね。

しかし、貴族なんて気難しい生き物を毎日相手にしているせいか。

侍女さん達の方が機敏に優れていますね。

さて、もう大丈夫そうですね。だからお母さまのところに向かうとしますか。

ついでにあの角からこちらの様子を窺っている侍女達には花瓶の後始末を命じましょう。

人にお尻を向けたまま口を利く無礼を働いた罰です。

今のうちに正しておかないと後で取り返しのつかない事になるやもしれませんからね。

「あ、あの、姫さま。」

「ん？」

「ありがとうございます！」

「よい、主の勤めを果たしただけよ。」

と、わたくしはその場を後にしたのでした。

そして後で。

「主の勤めって、うにゃー！ 恥ず！ めっちゃ恥ず！ 恥ずー！」

と、自分が口にしたセリフを思い出して羞恥に身悶えたのでした。

5話 双月の下の出会い。(前書き)

改正しました。

コメくだされた方、ありがとうございます。

後でお返事させていただきますね。

5話 双月の下の出会い。

みなさま、ごきげんよう。

ベアトリス、胸の辺りが気になって来た12歳になりました。

本日、わたくしはお父さまに連れられラグドリアン湖の湖畔で催された園遊会に来ております。

そしてそこである人物に出会ってしまい少々 いや、かなり怖い思いをしてしまったので。

心の安らぎと言つが癒しを求めこつやつて畔からボーツと湖面を眺めております。

はあ まさかアレに目を付けられていたとは。

ちなみにアレとは誰を指していると思います？

ヒント、青髪に青ヒゲの美中年と言えば？

そうです、無能王とか狂王とか呼ばれているガリア国王ジョセフさんです。

そしてこのジョセフさん。

いったいなにに当家の天幕までわざわざ足を運んで来たのかと云うと。

『おお！ そなたがベアトリス姫か！』

魔法が一切使えない無能の身だけに魔法の天才と謳われる姫に一人なりともお会いしたく。

本日は無礼と承知しつつもこうやってまいったしだいだ。

いや、お会い出来て本当に光栄だ、はっはっはっはっ！』

ええ、知らない内にわたくしはジョセフさんの興味をひいていたみたいです。

そして。

『いやいや、その歳でスクウェアアークラスのメイジとはまるであいつ
を見ているようだ。』

と、終始意味深な目で見られ。

『ベアトリス姫とはそのうちお会いする機会があると思うが。

その時はよしなに、ではまた、はっはっはっはっはっ！』

社交辞令と信じたいです。

しかし、もしわたくしが勇気を出して歪む前のジョセフさんに。

あなたは虚無の担い手なので4系統魔法は使えないのですよ。

それとシャルロットのパパだって聖人君子ではなく内心あなたに嫉妬しているんですから。

すれ違いな関係をさっさと修復した方がいいですよ。

なんて今から数年前にでも言ったら。

ガリアのみならずハルケギニアの歴史自体が大きく変化していたやもしれませんね。

でも、ヘタレなわたくしにはそんな事は出来ませんでした。

ごめんなさい、シャルロットのパパさん。

こんな薄情な小娘ですけど成仏される事を祈らせていただきます。

ん？ 背後から人の足音が。

当家の者がわたくしを連れ戻しに来たのでしょうか？

「やあ、遅れてすまないって、きみは確かクルデンホルフ大公国の
ベアトリス公女だったね。」

「う、ウェールズ皇太子殿下。」

背後から現れた人物はなんとわたくしの遠い遠い親戚でもある。

アルビオン王国のウェールズ・デューダー王子でした。

かなり前に一度お会いした事がありましたけど。

よく一目でわたくしがベアトリスだとわかりましたね。

やはりこの髪型でしょうか？

まあ、それはいいとして。

何故ここに殿下が？

ん？ 遅れてすまない 待ち合わせ ラグドリアン湖 。

あっ！ アンリエッタ姫との密会イベです！ 早くここから立ち去らなければ！

「ベアトリス姫はこんなところで一人でなにをしていたのだい？」

「え、あの、しょ、少々気分が悪くなりましてここで休んでおりました。」

「なんと、それはよくない。」

わたしがクルデンホルフ大公国の天幕までお送りいたそう。」

「あ、いや、今はかなり良くなりましたのでご心配には及びませんです。」

「我らは親戚ではないか、そう遠慮などせずともよい、さあ。」

いや、手を差し延べられても困るのですけど。

「あの、お気持ちは嬉しいのですが本当に大丈夫ですから、はい。」

「姫がそう言うなら致し方ない、しかし無理はなされぬ方がよいぞ。」

「いえ、ここで湖を眺めていましたらほんとーに気分が良くなりましてたので。」

「そうか、もしやラグドリアン湖に住まう水の精霊が。」

苦しむベアトリス姫を見過ごせず癒してくだされたのやも知れないな。」

いや、あの精霊さまにそれはないかと。

「そ、そうですね。」

さ、さてと、それではわたくしはこれで失礼させていただきます。」

と、そそくさとわたくしが殿下の横を通り過ぎようと時。

「あ、姫に少し尋ねたい事があるのだが。」

なんて言いながら殿下が足を踏み出すとそこには運が悪い事にわたくしのドレスの裾があり。

急ブレーキをかけられる形となつたわたくしは。

「ドレスの裾を踏んでるからーっ！」

なんて叫びながらこの後に予想される痛みに恐怖し。

目を閉じ後方に倒れて行つたのですけれど。

いつまで経っても地面の感触が伝わって来ません。

それを不思議に思ったわたくしはおそろおそると目を開けるとそこには。

「い、いやあ 大変失礼をいたしてしまった。」

とてもバツが悪そうにしている殿下の顔がありました。

どうやら殿下がわたくしを助けてくれたようで。

うわあー！ きっかけはどうあれ今わたくしお姫さま抱っこされてるじゃありませんかーっ！

それも正真正銘の王子さまに！

こゝこゝここれはかなり貴重な体験と言つか夢が叶っ あっ、いやなんでもありませんです。

「ベアトリス姫？」

「は、はいー！」

「顔が赤いようだが、どうなされた？」

「え？ っつ、これはその。」

「やはりまだご気分が優れないのではないか？」

心拍数と血圧なら人生最高値をドンドンと更新しているはずですよ。

「よし、やはりこのままクルデンホルフの天幕までお運びいたそう。」

「は、はい ぜひともお願いたしますって、それはだめーっ！」

本音は一分一秒でも長くこうされていたいんですけど。

今この瞬間もここに向かっていているはずの方にこの状況を見られたらいろいろマズイ事になりそうですので。

名残惜しいですけど早く降ろしてくださいな。

「べ、ベアトリス姫、そう暴れられては危ないぞ。」

いいから早く降ろしてください。

あの人、あの人、あの人、ここに来る前につて、ひゃあつ！

「ほら、危ないと言ったであろう、怪我はないかな？」

「はい ウェールズさま 。」

お姫さま抱っこされたままバタバタと暴れたら脚のみが下に落ちて。

気付けは殿下の胸に抱き抱えられている体勢に 。

ああ ヤバいです、頭がぼくっとしてきました って、いかーん！

さっきよりマズイ状況になってしまったじゃないですか！

こゝ、こんなところをアンリエッタ姫に見られでもしたら。

わたくしが泥棒猫扱いをされるばかりか。

殿下が浮気者扱いをされて原作ブレイクになる危険が！

は、早く放れないと！

うう、本当に名残惜しいですけど。

あなたの事はわたくしを人生初のお姫さま抱っこしていただいた方として終生忘れません。

それではおさらばです、殿下！

「あ、あの、殿下、わたくしは。」

「遅れてごめんなさい、ウェールズ。」

なんでこんな最悪のタイミングで貴女は来られるのですかアンリエッタ姫さま。

そうして、自分のオトコが自分との逢い引きの場所では抱き合っていたオンナをアンリエッタ姫さまが逃すはずもなく。

「まあ、ウェールズ！がベアトリス姫のドレスの裾をお踏みなられたと。」

「ああ、本当に姫には申し訳ない事をしてしまった。」

「うふふ、ウエルズ！も、おっちょこちよいですわね。」

「むう、失礼を働いてしまった後だけに言い返せぬな。」

「まあ、そこがウエルズ！の可愛いところですけどね。」

「あ、アンリエッタ姫 ど、どうされたのだ？」

「なにか今日はいつもと雰囲気が少し違うような気がするのだが。」

「あら、わたくしはいつもと変わりありませんわよ。」

「それよりウエルズ！、アンリエッタ姫なんて他人行儀じゃありませんこと。」

「いつものように、アン！、とお呼びになられて。」

「う、うむ。」

「姫さま わたくし達の言い訳を信じていませんね。」

「それと自分達の仲を見せ付けようとしているのはわかりますが。」

「あからさま過ぎて殿下、かなりひいちゃっておりますよ。」

「いや、しかし一国の姫のドレスを踏んでしまって頭を下げただけと言っのほ。」

わたし個人のみならずアルビオンの名にも関わる。

そこでだ、当家から姫に代わりのドレスを用意するのでそれで許して貰えないだろうか？」

いや、許すも許さないもこれ以上わたくしに係わらないでください。

ほら、隣の人がわたくしをめっちゃ睨んでいるじゃないですか。

「え、えっと、お気持ちだけで十分ですから殿下。」

それに安物のドレスですので、そうお気になさらないでください。」

「あら、さすがは当国の貴族達にもお金を貸せる程に裕福なクルデンホルフ大公国の公女さまですわね。」

「。。」

「そんな高級そうなドレスを安物とは、一度で良いから口にしてみたいものですわ。」

「。」「

そして長時間に渡るアンリエッタ姫のチクチクとした口撃からやっ
とわたくしが解放された時には。

「うう 胃が痛いよう 胃がキリキリと痛いよう。」「

肉体的にも精神的にもボロボロになっておりました。

そんなわけで楽しみにしていた大自然の中で食べる夕食をそこそこ
に終らせたわたくしは。

「はあ ジョセフさんと言い、アンリエッタ姫さまと言い、ひどい
目に遭わされました。

今日は書物を持って来ていない事ですし湖に浮かぶ双月を眺めてか
ら寝てしまつとしましようか。」「

そう思いカーディガンを羽織り自分の天幕からてくてくと湖を見渡
せる小高い丘に歩いて行こうとした時。

「あら、あなたはベアトリス姫じゃない。」「

透き通るようなソプラノの声に振り向くとそこには。

「ルイズさん。」

この時わたくしは。

目の前に立つ桃色がかった美しいブロンドの髪をした少女と自分が。

無二の親友となるとは思ってもおりませんでした。

6話 反省したけど後悔はしないかも。(前書き)

改正しましたので投稿いたします。

6話 反省したけど後悔はしないかも。

「わたくしの魔法を見せて欲しい ですか？」

「ええ、クルデンホルフの魔女と言われるあなたの魔法を、一度目にしたいの。」

「ま、魔女？ いつ、いつたい誰がそんな呼び方を？」

「誰って、みんなあなたの事をそう呼んでるわよ？」

「い、いつの間に。」

と、わたくしがショックを受けている時にルイズさんがボソッと小声で。

「あなたが魔法の天才だから自然とそう呼ばれ出したのよ。」

ほんと、羨ましい限りだわ。」

「え？ ルイズさん今なんて？」

「ううん、なんでもないわ。」

それでどうなの？ 魔法を見せてくれるの？ くれないの？」

「べつに魔法くらい構いませんけど。」

「ほんと？　ありがとう、嬉しいわー！」

そんなピョンピョンと跳びはねて喜ばれるとちょっと恥ずかしいんです。

「えっと、それじゃあ、ここですと当家の天幕に近いので場所を移しますね。」

「なんで？」

「　　護衛付きでお月見したくなかったのでこっそりと抜け出して来まして。」

「あなたもやるわね。」

あなたも？　あ、そうですね。

公爵家のご令嬢がこんな夜更けに一人で来られたと言う事は。

ルイズさんもわたくしと同じくですか。

そして場所は移りラグドリアン湖の畔へ。

「ここなら人目を気にしなくてもいいですね。

さて、なにをお見せすればよろしいですか？」

「その前にちょっといいかしら。」

「はい？」

「わたし達、今日初めて会ったばかりだけど。

歳も近いんだし遠いと言っても親戚なんだから堅苦しい話し方しないでいいわよ。」

あ、デジャヴ。

ほんと今日はよく親戚に会う日ですね。

ん？ そう言えばジョセフさんとも遡れば血の繋がりが。

こゝこれ以上は考えるのやめておきましょう。

「えっと、それではルイズさんと？」

「ルイズでいいわ、わたしもあなたをベアトリスと呼ばせてもらおうから。」

「はあ、わかりました。」

「えっと、それじゃなにか簡単なのから見せてくれないかしら？」

おや？ ルイズさんの性格なら派手なのとか綺麗なのをリクエストされると思っていましたが。

遠慮されているのでしょうか？

ならば簡単だけど派手そうなのをご披露させていただきますか。

さて、ちょうどすぐそこに湖がありますので水の系統魔法を！

「それでは、ウォーター・シールド！」

目の前に作り出したは、高さも幅も100メートル程度の薄く透き通った水の壁。

「詠唱無しでこの規模の水の壁を一瞬で。」

驚かれているみたいですね。

次行きますよ〜。

「ウォーター・ウィップ！」

手には長さ50メートル程度の水の鞭。

「なにこの手元から九本に枝分かれた水の鞭の動きは？」

ではでは、次行きますよ〜。

「火の系統魔法を行っきます！ 発火！」

杖を頭上てくるりと回すと現れたのは2メートル程の大きさの12個の炎の塊。

そして杖を夜空に浮かぶ双月を指して掲げ。

「たーまやー！」

「たまやっとなによ　しかもドーンってカラフルな色の爆発

してるし。」

さーて、真打ち行きます！

「パクリ魔法「もういいわ！」「へ？」

突然の大声に振り向くと、そこには俯きながら肩を震わせるルイズが。

「ルイズ？」

「もういいわ。」

「あの、お気に召さなかったですか？」

「わたし帰る。」

「あ、そっちはだめです！」

「きゃー！」

ああ 浅瀬で足を滑らして尻餅をつくように転ばれてしまわれました。

「怪我はありませんか？ さあ、わたくしの手に掴まってくだ、」

「 なんなのよ。」

「 え？」

「 なんなのよ、この差は。」

「 ルイズ？」

「 わたしとあなたの なにが違うと言つたよ。」

ルイズの顔からポロポロと落ちている水滴は、もしや。

「 あなたはなんでそんなポンポンと魔法が使えるのよ。」

「 。。。」

「 おかしいじゃない、不公平じゃない、なんでなのよ！」

「 。。。」

「 なんでわたしは魔法が使えないのよ！」

魔法の天才のあなたならわかるでしょ！

ねえ、なんでか教えてよ！」

そうでした。

原作知識があるだけに虚無の担い手と言っイメージが強くて忘れていましたが。

始祖の秘宝と水のルビーを手にする辺りまでルイズは。

ずっと辛い思いをされていたのです。

今思えば、わたくしに魔法を見せて欲しいとわざわざやって来たのも。

魔法を使いたいが為の一心で、きっと、藁にも縋る思いでやって来られたのでしょう。

「黙って立っていないでなんとか言いなさいよ！ ねえ！」

「わっ！ 冷たっ！」

考え込んでいたところを引っ張られて、浅瀬で女の子座りするよ
うな格好になってしまいました。

夜の湖は水温が低いのでお尻がすごく冷たいです。

「あ、ごごめんなさい。わ、わたし　そ、そんなつもりは。」

わたわたと、わたくしを抱え起こそうとするルイズの顔には。

やはり泣かれてましたか。

しかし、いや、ほんと、なんと言いますか。

身体は12歳ですけど、精神は前世を合わせればルイズより一回り以上年上の2じゅう。

い、今気付きましたけど、わたくしの精神実年齢は、みつ、三十路前のおば。

と、とりあえず、魔法が使えないルイズに対して大人気ない事をしてしまいました。

「ルイズ、ちょっとこっちに来なさい。」

「え?」

「いいから来なさいってば。」

ルイズの頭に手を回してぐいっと引き寄せて自分の胸元に抱え込み。

「ごめんなさい、ルイズ。」

あなたの事も考えないで魔法を見せびらかすような事をしてしまつて。」

「。」

「お詫びと言ったらなんですけど。」

こんな胸で良ければいっぱい泣いちゃってください。

いっぱい泣いて今までのルイズとおさらばしちゃいましょう。」

「今までのわたしと?」

うわぁー! 涙目ルイズの上目遣いの破壊力ハンパないです!

「ええ、いっぱい泣いて魔法が使えなくて辛い思いをしてきたルイズとお別れをして。」

新しいルイズとこんにはをしましょう。」

「新しい わたし？」

「お手伝いします、あなたが魔法を使えるようになるのを。」

「ほ、ほんとに。」

「はい、わたくしはクルデンホルフの魔女なのでしょう？」

その実力を持ってあなたが魔法を使えるようにして差し上げます。」

4系統魔法は無理でしょうけどコモンマジックならなんとかかなりそうですね。

「ちい姉さまと比べようがないくらい貧相な胸だけど、しばらく借りるわ。」

うっさいです、黙ってさっさと泣けです！

「うう うう うあ ああ うわあああああああああ！」

「よしよし。」

ふふ、こうやって頭を撫でてあげていると歳の離れた妹か娘を持った気分になって来ますね。

悲しい時や辛い時には泣くのが一番です。

あの場所で自分の運命を振り返り。

なんども泣いたわたくしが言うのだから間違いありません。

ん？ 華奢な身体に見合わず以外と力ありますね。

背中に回された腕が身体を締め上げて来て苦しいんですけど。

うっ は、肺から酸素から搾り出されて。

だ、だめです、いくら酸素を取り込もうとしても肺が膨らみません。

ぐぐるじい

うっ

ガク。

「あーすっかりしたわって、ちょっと、あなた大丈夫？」

「はっ あれ？ 受付の順番待ちをしていたはずなのに？」

「受付え？ なんの事が知らないけど、そろそろ水から上がらない？」

「そう言えば。」

確かにかなり身体が冷えてしまいましたね。

このままじゃ風邪をひいてしまいそうです。

しかし、自分で言うっておきながらなんですけど。

泣いたらほんとカラッとなりましたね。

「ほら、わたしの手を掴んで、また転んだら嫌でしょ。」

「あ、はい。」

ルイズに手を引かれてザブザブと浅瀬を歩く。

なんか立場が逆のような気がしますけど。

まあ、結果オーライと言う事でいいか。

「発火。」

「わあ〜温かい。」

濡れたまま天幕まで戻ると夜風で風邪をひきそうなので。

近くに頃がって手頃な木を燃やして暖を取る事にしました。

「ねえ、さっき言った事、本当なの？」

「え？」

「わたしが魔法を使えるようにしてくれて。」「

ああ、場の雰囲気に流されてそんな事を口走ってしまいましたね。

さて、いまさら原作ブレイクさせるのは嫌なので、だめですとは口

が裂けても言えませんし。

それにこの歳であれ程の精神的苦痛を抱えていた人を放ってはおけません。

しかも追い詰めたのが自分と来てますからね。

えっと、今のルイズにコモンマジックを使えるようにさせる方法は。

虚無の覚醒 それは始祖の秘宝とかが必要になりますから。

ん？ そう言えば原作ではどうやってルイズがコモンマジックを使えるように。

あ、自分が虚無の系統と自覚して。

と、なると。

わたくし演技力には自信ありませんが、やるしかありませんね。

「ルイズは魔法を使おうとするとどうなるんですか？」

「なんでそんな事を聞くのよ。」

「魔法の使い方を教えるにしても現状を知らないとだめだと思いまして。」

「爆発。」

「爆発ですか？」

「そうよ。」

「4系統魔法、すべてですか？」

「そうよ、悪い！」

「あの、なんで爆発するんですか？」

「魔法が失敗したからに決まっているからじゃない！」

「普通、魔法を失敗したら爆発しませんよ。」

「。。。」

「例えば火の系統のメイジが苦手な水の系統の魔法を使おうとして失敗したらどうなります？」

「それは。。。」

「そう、魔法が発動せずなにも起きませんよね。」

でもルイズは爆発する、すなわち魔法が発動している事になります。」

「あ。」

「もしかルイズは特殊な系統の魔法使いなのではないですか？」

「特殊な？」

「ええ、伝説とされている虚無の。」

「わたしが 虚無の？ な、なにを言っているのよ。」

そんなわけあるわけじゃない！」

こつから嘘で塗りかためます。

「でも、わたくしがルイズから感じられる力は、とても特殊なものに感じられて仕方がないのですけど。」

「力が？」

「はい、4系統魔法いずれの使い手とも違う力を感じられます。」

「。」

「ルイズがわたくしに言った言葉ですけど。

わたくし達は遠い親戚となりますよね。

そう、始祖ブリミルの血を受け継ぐ親戚に。」

「あつ。」

「もしかしたらわたくしは始祖の魔法の才能を引き継いだのやも知れませんが。」

しかし始祖が使ったと言う虚無の魔法を使う事は出来ません。

何故なら始祖がそうであったように。

虚無の担い手は他の系統の魔法を一切使う事が出来ないからです。」

「。」

「おそらく、いや、ほぼ間違いないでしょう。」

あなたは虚無の担い手ですよ、ルイズ。」

「わたしが 虚無の担い手。」

「ええ、羨ましい限りですよ。」

「わたしを羨ましい？ あなたが？」

ルイズの中でわたくしはどれだけ高評価されているのでしょうか？

「だって、虚無ですよ、虚無。」

わたくしがいくら頑張っても使えないのをルイズは使えるやも知れないんですもん。」

「。。」

「ルイズ、わたくしにあなたの魔法を見せてくれませんか？」

「わたしの魔法を？」

「ええ、伝説と言われる虚無の魔法をです。」

それがわたくしがあなたに魔法の使い方を教える授業料と言う事でしょうか？」

「あなたって、わたしより年下なのにしっかりしてるわね。」

「そうですね？」

「いいわ。」

「え？」

「わたしが虚無の魔法を使えるようになったら、あなたに一番に見せてあげる。」

その代わりに、しっかりとわたしに魔法の使い方を教えなさいよ。」

「ええ、約束ですよ、ルイズ。」

「これからよろしくね、ベアトリス。」

原作より少し早いルイズの虚無の担い手としての自覚。

それが今後にどう影響するかはわかりません。

けど、一人の少女が受けるはずだった苦痛を避ける事が出来たのだから確かです。

7話 蛍火。(前書き)

改正しました。

おふとんが恋しい季節がやって来ましたね。

冷え症のわたくしには朝晩がととてもとても辛いです。

7話 蛍火。

園遊会からほんの少しばかり月日が経過した頃。

「ん~~~~、ライト！ ライト！ ライト！」

ヴァリエール公爵家の敷地の中から透き通るようなソプラノの声が聞こえて来ました。

声の主はこの家の三女であるルイズ。

美しい緑の芝生の上で何をしているのかと云うと。

先日開かれた園遊会で出会った少女。

ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフに教えられた方法で魔法の練習をしている最中なのです。

その少女はルイズにこう言いました。

『遠い遠い国の話になります。』

その国には有り余る程のチャク　ま、魔力を持っていたけど。

初歩の初歩の魔法さえ満足に出来ずに、みんなからいつもばかりにされてきた人がいました。

でも、その人は自棄にならずに自分を信じて頑張って。

最終的に世界を救った英雄とか黄色いなんとかとまで言われる立派なしの　ま、魔法使いになる事が出来ました。

このハルケギニアに例えて言ったら。

コモンマジックも使えなかったメイジがスクウェアクラスのメイジどころか。

始祖ブリミルみたく凄い魔法を使ったり、複数の使い魔を使役するまでになったみたいなのです。

信じられないかも知れないけど、コレは本当のお話ですよ。

だからルイズも自分を信じて杖を振るってください。

あなたは絶対にすごい魔法使いになれるから。

自分の知らないところでクルデンホルフの魔女とか言われてわたくしが保証します。

あ、でも、虚無の担い手と言つのはいずれ時が来るでしょうから。

それまで二人だけの内緒にしましょうね。

じゃないとわたくしみたいく知らないところで二つ名を付けられたり、ロマリア辺りから教祖さま〜こつちに手を振ってください〜いって、ハメになるやも知れませんかね。

それじゃまずは頭の中で杖を振るったらこうなるってイメージを。

強くしつかりと想像するところから始めましょう。

は〜い、今あなたは真っ暗闇の中に立っております。

そこで明かりが欲しいあなたがライトを唱えると。

ほら、杖の先がだんだんと明るくなって来て辺りに光りが広がって行きました。

と、まあ、こんな感じでやってみてください。(

少女の教え方は決して上手いとは言えませんでした。

いえ、むしろ下手と言ってもいい部類に入るでしょう。

しかしルイズは魔法を使えない自分を決して笑わずに。

親身になって教えてくれた少女の教えを愚直なまでに実行しました。

そしてその頑張りは彼女を裏切りませんでした。

「うっっん、ライト！ あっ、また、ちょっとだけ光った！」

光と呼ぶには余りに弱々しい螢火のような光。

しかし彼女とつてそれはとてつもなく眩しい輝きを放つ光でした。

（自分は虚無の担い手で魔法を使えるんだって信じる事が大事。

あなたが言っていた通りだったはベアトリス。）

「光よ、光よ、光よ！ うっっん、ライトー！」

やがて日は傾き。

「あら、お帰りなさいルイズ。」

「ちい姉さま？ わたしの部屋の前でなにをしているの？」

魔法の練習を終え自分の部屋へと戻って来たルイズに話しかけるの

は。

ルイズが成長したら胸以外はこうなるであろう姿をした。

ヴァリエール公爵家の二女のカトレアでした。

「うふふ、今日も魔法の練習を頑張つて来たみたいね。」

「ええ、今日は10回も光つたのよ!」

「まあ、それはすごいじゃない、うふふ。」

「ちい姉さま? 先程からなにを笑っているの?」

「はい、これ。」

「手紙? あつ、ベアトリスからだわ!」

「そうよ、これをあなたに渡しに来たの。」

「ありがとう、ちい姉さま。」

(あらあら、余程ベアトリスさんの事が気に入ってるようね。)

心から嬉しそうな顔をして手紙を受け取る妹にカトレアの悪戯心が刺激され。

「私もベアトリスさんにお手紙を出さなければならぬわね。」

「へ？ ちい姉さまがベアトリスに？」

「ええ、いつも妹がお世話になっております。」

そそっかしい妹ですけど末永くよろしくお願いいたします、って。」

「は？」「は？」

「うふふ、ベアトリスさんと幸せにね、ルイズ。」

「はあ？」「

「あら、隠さなくてもいいのよ、ベアトリスさんの事好きなんですよ？」

「な、ななな何を言っているのちい姉さま！」

わ、わわわ私達そんな仲では ちい姉さま？」

姉の笑みが何時もと違う事にルイズが気付く。

「か、からかったわね、ちい姉さま！」

「あら？ もうわかつちゃった？」

「ひどーい！」

「あなたの嬉しそうな顔を見ていたらちよつと悪戯したくなっちゃったのよ。」

「もぉ〜！ でもいいわ許してあげる。」

「あら？ やけにあっさりとしているわね？」

「だって早くベアトリスのお手紙を読みたいのですもの。」

「あらあら、お熱い事。」

「ちい姉さま！」

「うふふ、でも少し悔しいわね。」

「なにが？」

「わたし達があなたに魔法を使えるように出来なかった事よ。」

「ごめんなさい。」

「あなたはなにも悪くないわ、謝るのは私達の方よ。」

何の手助けも出来なくてごめんなさいね。」

「ううん、そんな事ないわ。」

ちい姉さまだけじゃない、お母さまだってお父さまだって。

あのエレオノール姉さまだって。

わたしの為に一生懸命になってくれたのわたし知っているわ。」

「ルイズ。」

「だから謝らないで、ちい姉さま。」

「　　ありがとう、ルイズ。」

「うっん、わたしこそありがとう、ちい姉さま。」

「それにしてもあなたがベアトリスさんとお会いしたのって園遊会の時よね？」

それからまだ10日も経っていないのにあなたに魔法を使えるようにさせるなんて。

クルデンホルフの魔女の名はさすがね。」

「わたしもそう思うわ。でも、実際に会うと全然凄そうに見えないのよ。」

「まあ、それはベアトリスさんに失礼じゃなくて。」

「ちい姉さまもベアトリスに会えばわかるわよ。」

「そうねえ、機会があればお会いしてお話してみたいわね。」

「じゃあ、お手紙のお返事にそう書いておくわね。」

「あまり無理を言っただんがらせてはいけませんよ。」

「大丈夫よ、あっちもあたしと会いたい会いたいって言ってるもの。」

「あらあら、ごちそうさま。」

「だっ、だから違っただんが言ってるじゃない、もう!」

「うふふ。そう言えば、暗くなって来たからルイズの魔法で明るくしてくれないかしら。」

「いいわよ、よく見ていてね、ちい姉さま。」

「う~~~~ん、ライト~~~~!」

「まあ、とっても温かい光ね。」

まだまだとても小さな蛍火。

しかしそれはヴァリエール家に笑顔をもたらす光りでもありませんでした。

8話 魔法の都へ。(前書き)

新話とーこーしまーす。

ちと、寒くなってきた今日この頃が嫌いです。

手荒れする前に無洗米買おつかなあ。

8話 魔法の都へ。

わたくしとルイズが出会ってからおよそ2年の月日が流れた春のある日。

わたくしの住む城の一角に大勢の人達が集まっていました。

その人集り中心に位置するのは数台の竜籠。

その中で取り分け豪華かな装飾で飾られた1台の横にこの国の王室。

つまり、わたくし達家族の姿がありました。

「出立の準備が整ったようですね。」

「ベアトリスや、その、わざわざトリスティンまで「あなた
!」「う。」

「何度同じ事を言えば気が済むのですか!」

「う、うむ、しかし本当に一人でよいのか?」

「はい、お供や警護の者を引き連れて行ったらクルデンホルフの力を見せ付けるどころか。」

あの国の姫はよい歳をしてお守りが必要なのだと諍りを受けてしま
いますわ。」

実際、原作でギーシュさんもお金持ちは見栄を張るのが好きなのさ
とばかりにしてみましたからね。

「むづ。」

「さて、そろそろ行ってまいりますわね。」

お父さまもお母さまもお元気で。」

そう言ってわたくしは竜籠に乗り込み空の人となりました。

目的地はトリステイン王国にあるトリステイン魔法学院。

14歳になったわたくしはこの春から親友であるルイズの1学年下
として。

トリステイン魔法学院に通う事になったのです。

「ふふ、あれだけ原作からこの世界が変わってしまふのを嫌っていたわたくしが。」

自ら望んで変えようとしているのだから人とは思議なものですね。

「

そうなんです、原作より1年早い留学はわたくしが望んだ事なので
す。

人はなにかのきっかけで変わる事があると言いますが。

わたくしもまたルイズと出会い交遊を重ねる内に変わったのです。

わたくしが変わる事が出来た決定的なきっかけになった事と言えば。

やはりルイズが魔法の練習のし過ぎで倒れたと耳にし。

ルイズを見舞うべくお父さまの反対を押し切りラ・ヴァリエール公
爵家へと向かい。

ベッドに横たわっていたルイズに治癒の魔法をかけていた時にした

聞いたルイズの心の声でした。

『ありがとう、あなたのおかげでずいぶんと楽になったわ。

これでまた明日から魔法の練習が出来るわね。

え？　しばらく休みなさいって？

嫌よ、休んだらあなたみたいなすごいメイジになるのが遅れるじゃない。

わたしは早くあなたみたいなすごいメイジになって。

あなたがこうしてわたしの事を助けてくれるように。

一回しか言わないからよく聞きなさいよ。

わ、わわわたしも親友のあ、あああなたが困っている時に、た、た助けてあげたいのよ。

ん？　俯きながら震えてどうしたのよ？

きゃっ！　きゅ、急に抱き着いて来てどうしたのよって、あなた泣いて。

うっ、ぐ、ぐるじい、息が出来ないから放して。

し、死ぬ、死んでしまっ。

ち、ちい姉さま、ちい姉さま助けて　　ガク。』

ルイズの言葉が余りに嬉しくて、ついやり過ぎてしまいました。

慌てて治癒の魔法をかけましたが、なかなか息を吹き返さないの。

前世の保険体育の授業で習った人工呼吸を試みたら蘇生に成功。

しかしお互いにファーストキスだった為に。

その後もものすごく気まずい雰囲気になってしまいました。

しかし、あの時はほんとうに焦りましたね。

もしルイズが息を吹き返さない時は。

責任取ってその場で一緒に死ぬしか無いとまで考えて人工呼吸しましたからね。

「待っててくださいね、ルイズ。わたくしもあなたと一緒に戦うか

「ふ。」

この日から10日の早朝。

女子寮のある部屋のドアをノックするルイズの姿があった。

「早く起きないと朝食の時間に合わないわよ、ベアトリスー！

このわたしが起こしに来てあげてるんだから早く起きなさいよ！」

「ふあい？」

ドアの向こうから現れたのは眠たい目をした寝巻き姿のベアトリスであった。

「ほら、早くこっち来なさい。」

「ふにあ？」

しかしルイズは怒るでもなくベアトリスの手を掴みドレッサーの前に座らせると。

実に手慣れた手つきで櫛でベアトリスの髪を梳かし始める。

そう、ベアトリスがルイズの言葉で変わったように。

ルイズもまたベアトリスの言葉を聞き変わったのだ。

二人は友人となつてからお互いの家に何度か泊まりに行った事があり。

その時に朝が弱いベアトリスが寝ぼけてルイズの事を、こつ呼んだのだ。

『 もう あさですかあ ルイズおねえさまあ 』

これが末っ子のルイズのハートをがっしりと掴み。

これ以降ルイズはベアトリスの事を友人と言うより。

出来は良いがどこか抜けている可愛い妹として扱うようになり。

なにかにつけて世話を焼くようになったのだ。

ちなみにラ・ヴァリエール公爵一家もルイズが魔法を使えるようになったベアトリスを気に入っており。

ベアトリスが泊まりに来るとなかなか帰さないの。

クルデンホルフ大公はベアトリスをラ・ヴァリエール公爵家に行かせたくないのだ。

「これでよしと、髪は自分で結えるでしょ。

わたしは着替えと制服用意しててあげるから。」

「ん〜ありがと〜ルイズおねえさま〜」

その言葉にピタリとルイズの動きが止まり、ふるふると震えながら。

「そ、そそそよ、優しいルイズお姉さまに、かかか感謝しなさいよ。」

それから場所は生徒達が集う食堂へと移り。

「うん。」

難しい顔をするベアトリス。

「どうしたのよ?」

「やっぱりこの場所おかしくないですか?」

「場所?」

「わたくしの座っている席ですよ席。」

今わたくしが座っている席はルイズの隣。

すなわち2年生のテーブルの席ですよね?」

「それがどうしたって言うのよ?」

「やっぱり、わたくしはあちらで食事を取った方が良いのではないかと思います。」

別に何年生はここと言う決まりは無いが。

決まりは無くても暗黙のルールと言うものはあるので。

そのルールに触れていると思うと居心地が悪いのだろう。

「なによ、あんたわたしの隣よりあっちの1年生のテーブルに行きたいっての!」

ジロリと睨むルイズ。

「い、いえ、別にそう言う訳ではないんですけど。」

「ならいいじゃない、ほらお祈りが始まるわよ。」

「あう。」

実に気持ちいいくらいのルイズっぷりを発揮し。

ベアトリスの異議を遮るルイズ。

そうして肩身の狭い思いをしながら食事を終えたベアトリスはルイズと別れて教室へと向かい。

席に着いて授業が始まるのを待っていると入室して来たのは。

「新入生の諸君。君らが最強と思う系統魔法はなんだ!」

あ、やっと頭が覚めて来ました。

みなさま、おはようございます。

はい、教室に入って来られたのは風がサイコーのあの先生です。

わたくしはこの先生が嫌いなのですよね。

理由はキュルケさんを吹き飛ばしたあれですよ。

どんな意図があったか知りませんが。

女の子にあれはないと思いませんか？

「ミス・クルデンホルフ。きみはどう思うかね？」

うわあ、当てられちゃいました。

当たり障り無く風とで答えておきましょうかねえ。

までよ。

キュルケさんのイベントは才人さんが召喚されてからだっただけです。

と、言う事はまだ発生はしていないので。

ここでこの風の先生を叩いておけばキュルケさんが吹き飛ばされる事が無いかも。

うーん、ここは後にルイズの良い友人となるキュルケさんの為に人肌脱ぎますか。

「はい、わたくしは最強の系統魔法は存在しないと思います。」

「なにい？」

「論より証拠です、わたくしが魔法を撃ちますからミスタ・ギトーは風の障壁で防いでいただけですか？」

「よかるう、思いつ切りやりたまえ！」

「それでは行きます！」

杖を振るい作り出したは3メートル程度の水の球体。

そしてそれから勢いよく水が放出されて対象を吹き飛ばすオリジナル魔法。

「ウォーター・プレッシャー！」

その結果。

「うう まさか一人で教室の後片付けをするハメになるとは。」

ミスタ・ギターを風の障壁ごと吹っ飛ばしたまではよかったんですけど。

つい、やり過ぎてしまい教室中水浸しになり。

オールド・オスマンより教室の後片付けを命じられてしまいました。

「聞いたわよ、あのミスタ・ギターを医務室送りにしたんですね。」

あ、ルイズが呆れる顔をしながら教室に入って来ました。

「それにしても。」

きよろきよろと教室中を見渡して。

「あんだ、ばかでしょ？」

くっ、言い返せないです。

「ほら、貸しなさい。」

モップを取られてしまいました。

「手伝ってくれるのですか？」

「そうよ、感謝しなさいよ。」

「でも、一人でやりなさいって言われてますので気持ちだけいただきます。」

「そんなのバレなきやいいのよ。」

ほら、その机を浮かせて。」

「でも。」

「バレたらバレたで一緒に罰を受ければいいだけの事よ。」

「ありがとう、ルイズ。」

「。」

ん？ なんですかその『違っだろ』って、顔は？

あ、もしや。

「ありがとう、ルイズおねえさま。」

「く~~~~~！ さあ、さつさと終わらせてクックベリーパイを食べに行くわよ！

ほら、そこら辺のをさつさと浮かせなさい！

「はい。」

そしてあっという間に片付けは終わり。

昼食を食べに行く食堂までの道すがら。

「明日、春の召還の儀式を？」

「そうよ、きつとわたしに相応しい使い魔を召喚して見せるわ。」

ついにルイズの手によりこの世界に才人さんが召喚される日がやって来ましたか。

そして原作が始まりルイズは虚無の担い手として望まぬ争いへと。

「ベアトリス、ベアトリス！」

「はっ　　どうしました？」

「それはごっちのセリフよ、どうしたのよ急に難しい顔をして黙りこくっちゃって？」

「ごめんなさい、ちょっと考え事をしてました。」

えっと、召喚の儀式でしたね。

ルイズにはきつと素晴らしい使い魔を呼び出す事が出来ますよ。」

「自分で言うのもなんだけど、やけに自信ありげに言っつわね？」

それはまあ、原作でルイズが才人さん呼び出す事を知っておりますからね。

でも、そうなるルイズは才人さんに。

ちょっと寂しくなりますね。

「ベアトリス。」

「はっ　　なんですか？」

「ねえ、あんたどうしたのよ？　　なにか変よ？」

「　　そんな事ありませんよ。」

さあ、早く食堂に行きましょう。」

「あ、こら、手を引つ張らないでよ。」

そうして翌日。

自らの最愛の人となる相手をルイズはこのハルケギニアに召喚し。

ゼロの使い魔の世界が本当の意味でスタートをいたしました。

9話 何事も形からですよ。(前書き)

先日とんでもないのを目撃してしまいました。

右半分がガチャピンで左半分が熊のプーさんと言う着ぐるみを着た人です。

縫い合わせが雑でしたので個人でされたのは間違いないでしょうが。

いったいなにをしたいのでしょうか。

えーと、今回は召喚された才人を待ち受けていたいたのはベアトリ
ス扮するあの人です。

9話 何事も形からですよ。

うん、服は仕方ないとして髪型は よし、これでいいですね。

後はこの眼鏡をつけて、目つきを厳しくして。

「コホン、コホン、あゝあゝ、んっんっ。

生意気を言うのはその口かしら！ ちびルイズ！」

おおゝかなり似て来たのではないでしょうか？

もう一回やってみましょう。

「このわたくしを誰だと思っているのかしら！

わたくしはラ・ヴァリエール公爵家のエレオノールよ！」

はっ。

み、みなさま い、いつから見えておりましたか？

まさか最初からではありませんよね？

ま、まあ、別にやましい事をしている訳ではございませんので見られても構わないのですけど。

えっと、とりあえずなにをしていたかをご説明いたしますと。

ルイズの為にも才人さんには早くこの世界に慣れていただきたくて。

数日前からわたくしが才人さんにこの世界の事を教えているのですよ。

でもってこの格好は。

人に物事を教えるのなら厳しく教えた方がその人の為かな。なんて思った時に。

ふと頭に浮かんだのがエレオノールさんと言う訳です。

まあ、何事も形から入れますよ。

さて、今日もビシバシと厳しく扱ってあげようではありませんか。

「待っていないよ、ちびルイズ。おゝほっほっほっ、です。」

そうしてベアトリスが向かったルイズの部屋ではと言つと。

「きゅ、急に寒気が。」

しかし、まさかあの子があんな凝り性だとは思わなかったわ。」

「なあ、あの女の子から授業を受けるのおれなのに。」

なんでお前、じゃなくてルイズさんはそんなに疲れてんだ？」

「うっさいわね。放っておいてよ。」

「んだよ、せつかく人が心配してやってんのに。」

「平民に心配される程わたしは落ちぶれていないわ。」

「へいへい、そうですかそうですか。そいつは失礼しましたね。」

「むっ、なによその態度は！ ひっ、来た。」

ルイズが才人の態度に激昂しようとしたその時に現れたのは。

「い、いいいらっしやい、エレ姉さじゃなくて、ベアトリス。」

「怒鳴り声が聞こえ気がしたのですが、なにかありましたか？」

「そ、そそそんなはしたない真似をわたしがする訳ないじゃないの！」

眼鏡をくいつと上げながら尋ねるベアトリスに慌てるルイズ。

「気のせいでしたかね？ さて、才人さん。」

予習と復習はしっかりとされましたか？」

「あ、ああ、一応はしたけど。」

「一応？」

「い、いや、ちゃんとしてましたです、はい。」

「よろしい。ではこちらのプリントをどうぞ。」

ハルケギニア常識問題と手書きで書かれた紙を才人に渡す。

「今からこの100問を才人さんに解いていただきます。」

「え、マジで！」

「ええ、わたくし達はベッドにでも座っておりますから才人さんはあちらのテーブルどうぞ。」

そう言ってベアトリスはルイズが座っていたベッドへと歩いて行く
と。

「才人さんにしっかりとハルケギニアに事を教えましたか、ルイズ？」

「え、ええ、ちゃんと教えたわよ。」

「そうですか。ではテストの結果が楽しみですね。」

「そ、そうね。」

苦手な姉と一緒にいるかのような錯覚を覚えて居心地がとても悪いルイズ。

そうして時間は経過し。

「はい、そこまで。」

「ああー疲れたー。」

才人の手からプリントを受け取り採点すると。

「55点。」

その結果にまるでエレオノールが乗り移ったかのようにベアトリスは。

「ルイズ。」

「な、なによ。」

「あなた、才人さんにしっかりとハルケギニアの事を教えたとわたくしに言いましたね？」

「う、うん。」

「なら、なんですかこの結果は！」

「そ、それはこいつが覚えが悪いから。」

「ちびルイズ！」

「ひゃ、ひゃい！」

「わたくしの目はごまかせませんよ！」

「え、あ、あの、その。」

「嘘をつく口はこの口ですか!」

「いひゃい、いひゃい、ゆ、ゆるひてお姉さまあ!」

トラウマからか頬を抓る相手が姉にしか見えなくなっているルイズ。

「いいですか、使い魔の恥は主であるあなたの恥でもあるのですよ!

わたくしはあなたに恥をかいで欲しくないからこうしてるのがおわかりですか!」

「は、はい! わかります! わかりますから放して!」

「いいえ、あなたはわかっておりません!」

「ごめんなさい! 許してエレ姉さま!」

「違います。わたくしはベアトリスです!」

「あーん、もうどっちでもいいから許して!」

そんな二人のやり取りを見て才人は。

エレオノールと言う人物に対して恐怖心を抱いたのであった。

そうしてルイズが嫌がるのでエレオノールの格好をやめて。

いつも通りの姿になったベアトリスは。

「つい、やり過ぎてしまったみたいでごめんなさい。」

「い、いいわよ、気にしていないから。」

「ああ、頬つぺたが赤くなってしまって 今治しますからね。」

「こ、これくらい大丈夫よ。」

「だめです！ いいからじっとしていてください！」

と、言っつて杖を取り出しルイズに治癒の魔法をかける。

「はい、これでもう大丈夫 ん？ お二人ともどうされましたか？」

「い、いや。」

「な、なんでもないわ。」

このギャップはなんなのだろうと考えてしまう二人。

「そうですか？ そう言えばこの世界にはもう慣れられましたか、才人さん？」

「あ、ああ、おかげさまでたいぶ慣れて来たよ。」

「そうですか、それはよかったです。」

「おれの為にいろいろとしてくれてありがとな。」

「いいえ、才人さんはルイズの使い魔さんなのですから。」

わたくしは当然の事をしたまでするのでお気になさらないでください。」

そう、ベアトリスがいろいろと世話を焼いた事により。

才人は原作より遥かにマシな環境で暮らしていたのだ。

「あ、そうだ。また才人さんの世界の歌を教えてくださいませんか？」

「ああ、いいぜって言うても、だいたい教えてしまったからなあ。」

「なんでもいいですよ。」

「なんでもって言われても、流行りの歌以外はおれ余り知らないし。」

後は知ってると言ったらアニソンくらいしか残ってねえから困ったな。」

「それでもよいから教えてくださいませんか？」

「え、いいの？」

「はい。」

「えっと、んじゃあ。」

才人が暮らしていた世界の日本が自分の暮らしていた日本と同じかはわからない。

しかしそれでもいいからベアトリスは聞きたいのだ。

そしてこの事が意外な副次的効果をもたらした。

どうみても詩人や文化人に見えない才人の口からポンポンと多種多様な歌が出て来る事により。

才人が異世界からやって来たと言うのをルイズが信じたのだ。

こうして原作とは多少異なるこの世界の3人に翌日待ち受けていたのは。

例の香水事件であった。

10話 意味不なバラ。(前書き)

暗躍するベアトリス。

その時ルイズと才人は？です。

10話 意味不なバラ。

ギーシュの香水事件に関してベアトリスは。

ルイズと才人の心の距離を縮める為と才人自身が強くなる為にも必要な出来事だと思っております。

それから才人を回避させようとは思っていなかった。

そのせいでと言う訳では無いが。

(ごめんね、シエスタさん。

これも才人さんの為と思って堪えてくださいね。

もう少しで才さんが現れるはずですから。)

と、物陰からベアトリスが覗く先には。

両頬を腫らして偉ぶるギーシュと畏まるシエスタの姿が。

そう、香水事件が発生したのだ。

が、しかし。

(あ、あれ？ おかしいですね。そろそろ才さんが現れてもよい頃なはずなのに？)

いつまで経っても才人の姿は現れず。

「も、申し訳ございませんでした。

わたし、わたし、そんなつもりでは。」

「泣けば済むと言う問題ではないのだよ平民のメイドくん。」

「は、はい。」

「きみは自分のしでかした事をちゃんと理解しているのかい？

きみは自分の命を持ってしても償いきれない罪を犯したのだよ？」

(あ、あ、っ？ あのがきんちよ今なんて言いやがりましたか！)

命と言う言葉に敏感なベアトリスがギーシュの一言にキレた。

「ミスタ・グラモン！ 自分の痴態を他者の責任にするとは、それでもトリステイン貴族ですか！」

その声に皆が振り返るとそこには両手を腰に当てながら胸を張ったベアトリスの姿が。

慌てて身を正すギーシュと野次馬達。

「こ、これはクルデンホルフ姫殿下ではありませぬか！」

いつ見ても愛らしいお姿を「そんな見え透い世辞などよい！」い、いえ、お世辞などでは。」

「ミスタ・グラモン！ このメイドに頭を下げなさい！」

「な、なにゆえ貴族のぼくが平民などに頭を下げなければならないのですか！」

「貴族ですって？ 己が行いが招いた結果を弱者に八つ当たりするあなたのどこか貴族だと言うのですか！」

「し、しかし。」

「なんです？ 言ってみなさい。」

「は、はい。平民は我ら貴族に従うのが当然ではありませぬか。」

「それで？」

「べ、別に貴族のぼくがこの平民を使い憂さを晴らしたとしてもなんら問題はないかと。」

その言葉を聞きベアトリスは心底呆れたと言うふう頭に左右に振り。

「よいでしょう。あなたのそのねじまがった性根。

このわたくしが叩き直してあげます！」

「はっ？ く、クルデンホルフ姫殿下、なにを仰っておられるのですか？」

「躰です。」

「は？」

「わがままな子供に躰をしてあげようと言うのです！」

さあ！ 杖を取りなさい！」

その言葉に野次馬達からギーシュに対しての笑い声が上がる。

（なにが躰だ！ 小娘が生意気な事を！）

さすがにギーシュも頭に来たが相手は独立国の姫殿下。

（腹は立つがここで万が一にでも怪我をさせてしまったてはマズイ事になってしまう。）

なんとか自制し。

「しよ、所用を思い出しましたのでぼくはこれで。」

と、その場から立ち去ろうとしたのだが。

「グラモンの家名まで地に落とすつもりですか？」

このベアトリスの言葉にギーシュは顔を歪め。

「このギーシュ・ド・グラモン。」

謹んでクルデンホルフ姫殿下のお相手をさせていただきます！」

そして場所はヴェストリの広場へと移り。

「賤と言っても一方的に打ち付けられるのはお嫌でしょう。」

「さあ、ご随意にどうぞミス・グラモン。」

（どこまでばくをばかにするのかね！）

（ここは怪我をさせないようにワルキューレで驚かせてやるか！）

バラを振り自慢のワルキューレを作り出そうとした時ギーシュの手が止まった。

（な、なんなんだね、この凄まじい魔力は？）

急速に頭が冷えて行くギーシュは思い出す。

ベアトリスが齡12歳にして4系統全ての魔法を使いこなした天才メイジと言う事を。

そしてその事がこうして対峙していると真実と言う事が嫌と言う程に理解出来た。

「来ないならこちらから行きますよ。」

そう言うとベアトリスは杖を振るい。

「これはあなたがさつきメイドにした行為です！

ウィンディア・アイシクル！」

「うわああああーっ！」

無数の氷の矢が自分に降り注ぐように襲い掛かって来るのにギィシユは悲鳴をあげる。

しかしいつまで経っても身体を襲う痛みの無い事に疑問を感じ。

恐る恐ると目を開けるとそこは数えるのが億劫になるくらいの無数の氷の矢が地面に突き刺さっており。

今さらながらにクルデンホルフの魔女と呼ばれるベアトリスの実力に背筋に冷たいものが走る。

そんなギィシユにベアトリスは諭すように話し掛けた。

「どうですか、圧倒的な力と言うものに晒された恐怖は？」

「く、クルデンホルフ姫殿下。」

「もう一度問います。弱者に力を振るい恐怖を味あわせるのが貴族のする事ですか？」

「ぼくが間違っておりました。」

「そう、わかっていただけでしたか。」

「はい、ありがとうございます、クルデンホルフ姫殿下。」

不肖、このギーシュ・ド・グラモン。

女性の愛で方を間違っておりました。」

「へ？」

予想外の返答にベアトリスから間の抜けた声が出る。

「これからは一人の女性に対してのみ己の愛を囁く所存。」

「は？」

「ぼくの間違った愛の犠牲になった美しき花達にはこれより許しを乞うてまいります。」

「あ、いや、あの、わたくしが言いたいの。」

「ああ。」「心配には及びません。」

先程のメイドにもすっかりと許しを乞う所存でございます。」

「そ、それがいいと思いますけど、わたくしが言いのは。」

「おお、こうしてはいられない。」

生まれ変わったぼくの愛で早く傷ついた花達を慰めねば。」

「いや、あの。」

「では、クルデンホルフ姫殿下。ぼくはこれにて失礼を。」

「なんなのよ。」

余りに奇怪なギーシュの思考にベアトリスが呆気に取られていると。

「ちょっとベアトリス。これはなんの騒ぎなのよ?」

「うわあ、なんだよこの氷の槍みたいなの?」

と、騒ぎを聞き付けてやって来たのはルイズと才人。

「ふ、二人ともいったいどこに?」

「どこについて、自分の部屋でサイトに勉強を教えてたのよ。」

（サイト？）

「ああ、ルイズのおかげでいつ抜き打ちテストされてもいいようにバッチリと覚えさせ！」

（ルイズ？）

「あんだね、あんまり調子のいい事言ってたしに恥をかかせないでよ？」

「へいへい。頑張らせていただきますです、ご主人さま。」

「調子がいいわねえ。まあ、いいわ。」

で、なにがあつたのよベアトリス？」

この二人、なぜこんなにも急に仲が良くなったのかと言うと。

エレオノールの格好をした時のベアトリスに恐怖を感じた二人はそれこそ必死になり勉強を教え学び。

その結果、いわゆる戦友のような感情が芽生えたのだ。

しかしそんな事を知らないベアトリスは。

(え？ なに？ いったいなにがこの二人に？

て言つか結局わたくしはいったいなにを？)

そうして混乱するベアトリスにこの後待ち受けていたのは。

ボロボロになった芝生を一人で直しなさいと言うオールド・オスマンからの処分であった。

「うう なんてこんな事になってしまったのでしょうか くすんくすん。」

一人寂しく芝生を直すベアトリスを見る4つ目。

「お、みんないなくなっただみただぜ。」

「準備はいいわね、行くわよ。」

友が困った時にこそ手を差し延べるのが親友と言っのならば。

それはきっと今のルイズ達の事を言っただろう。

11話 青い少女。(前書き)

本と云えばあの人ですよね。

11話 青い少女。

「おおゝさすがはトリスティンが誇る魔法学院なだけありますね。」

あら、みなさんこんにちは。

本日は学院の図書館に来ているのですけど。

見てくださいこのこの書物の量を！

ざっと見も数千、いや、数万本くらいの書物はありそうですね。

これなら一年間くらいは暇が潰せそうですね。

ん？ なんですか？ 別におかしな事を言った あっ！

そうでしたそうでした。

実はわたくし本を読むのが異常なくらい早いのです。

どうやらこれも悪戯神様が与えてくれた魔法の才能の一部みたいで。

おかげで時間をかけずに本を読み理解する事が出来るのです。

さて、ではあの棚の端から順に読んで行きましょうかね。

え〜と、どれどれ中身は「コモンマジック」の。

はい、却下。

前に読んだ本と内容が被りまくります。

次行ってみましょか次。

そんな事をわたくしがやっているよ。

「邪魔。」

「はい？」

きよろきよろ周囲を見渡すが人の姿は無し。

「おかしいですね。確かに人の声が聞こえたはずなのに？」

気のせいかと思いい棚から別な本を取り出そうとすると。

「邪魔。」

またもや人の声。

しかし辺りを見渡しても人の姿は一切なし。

「も、もしや、魔法学院の七不思議のひとつかに遭遇しているのか。」

そんな事を考えていると。

「上。」

「うえ？」

その声につられて上を見上げるとそこには。

「ひいいーっ！ ゆ、幽霊が浮かんでるううーっ！」

た、大変です！

まだ夕方だと言うのに、ゆ、ゆゆ幽霊を見てしまいました！

しかもその幽霊さん、すーっとわたくしの目の前に下りて来たではないですか！

窓から差し込む夕日が逆光になり幽霊さんの顔がよく見えませんが。

「幽霊。」

なんかこの幽霊さん、自己主張しながらこちらに手を伸ばしてくるのですけどー！

「幽霊。」

あわわわわ。

まるで真っ青な青空のような美しい青い髪の毛でした。

(もしやこの幽霊さんの正体はシャ、あ、いや、タバサさん？)

幽霊さんの顔を覗き込むと。

(あ、やっぱり。)

わたくしが幽霊と思ったのは、シャルロット・エレヌ・オルレア
ンことタバサさんでした。

でも人気の無い図書室の宙に生氣を感じさせない人が浮いていたら。

誰だって勘違いすると思いませんか？

あ、それよりもまず。

「あ、あの ミス・タバサ。

なんと言いますかわたくしの勘違いだったみたいでして。」

「勘違い？」

あ、タバサさんの震えがピタリと止まりました。

「はい、申し訳ございませんでした。」

「そう。」

わたくしを睨みながら離れるタバサさんが怖いです。

「あの 本をお探しの所を邪魔をして申し訳ございませんでした。」

わたくしはこれにて失礼をさせていただきます。」

「。」

「あの？」

「あなた。」

「はい？」

「クルデンホルフの魔女。」

「ま、まあ、そうとも呼ばれておりますね。」

「12歳でスクウェアクラスになった天才メイジ。」

正確にはちょっと違いますけど。

「恥ずかしながらそうとも呼ばれる事もありますね。」

「お父さま。」

「は。」

「。」

「。」

「。」

「。」

「。」

「あの、ミス・タバサ。」

「。」

うん。どうしたと言っのでしょ。

わたくしの顔を見たまま動かなくなっちゃいました。

なにか話題を振ってみましようかね。

「ところで、さっきはなんの本を探されてたのですか？」

「ヒーリング。」

おお、反応が返って来ました。

「ヒーリング？ 確かミス・タバサは水と風の系統を使えると聞いた事が。」

「応用。」

ああ、なるほど。

授業で習う以上の治癒の魔法の使い方を知りたくて調べていたと言
う訳ですか。

「あなた、知らない？」

「わたくしですか？ わたくしはここを使うのが今日初めてですの
でちょっと。」

「そう。」

ん？ 少し疲れた様子ですね。

「どれくらい探されてたのですか？」

「2時間。」

「そ、それはまた。」

しかし、それだけ探して見当たらないと言う事は。

誰か持って帰ってしまったのでしょうかね？」

「殺す。」

い、いきなり物騒な事を言う人ですね。

ま、まあ、本来ここの本は持ち出し禁止ですのでルール違反者には罰を与えるべきですけど。

なにも命まで取る事はないじゃないですかタバサさん。

「し、しかし、もし本当にそうなら困った人もいたもんですね。」

「困った。」

ずいぶんと深刻な表情をされますね。

あ、そうだ！

先程の謝罪にわたくしが教えたいでしょう。

「ミス・タバサ。ヒーリングの応用の本なら何冊か読んだ事がございますので。」

それをお教えいたしましょうか？」

「あなたが？」

「ええ。ミス・タバサがよろしければですけど。」

「。」

タバサさん思案中〜。

「お願いする。」

「かしこまりました。ではここで立ち話もなんですので。」

あちらの席に座りましょう。」

と、その場から移動しようとする。

「もっといい場所がある。」

「は？」

「ついて来て。」

「あ、ミス・タバサ！」

すたすたと出口の方に歩いて行ってしまいました。

もっといい場所ってどこなのでしょう？

「。」

おっと、タバサさんが出口の所からこちらを見えています。

早くついて来いって事ですな。

そしてわたくしが連れられて行った先はと言うと。

「タバサさんの 部屋？」

「入って。」

「お、お邪魔いたします。」

促されて中に入るとまず思った事は。

シンプル・ザ・ベスト。

年頃の女の子の部屋には全然見えないですねえ。

が、しかしわたくしの目はごまかせませんよ！

あの棚に並んだ、そう、右端から5番目の本！

あれはわたくしも愛読しているイーヴァルディの勇者ではありませんか！

ふふふ、タバサさんとの距離が一気に近付いた気がしてなりません。

そんな事を思っていると、タバサさんはいつの間にも用意したのか。

ワインの注がれたグラスをわたくしに渡すとベッドの端に座り。

「座って。」

と、ぼんぼんと自分の横を手で叩く。

これは、全て語るまで帰さないぞ、と言いつ遠回しな意思表示なんじゃないか？

「。」

「あ、はい。今座りますです。」

無言のプレッシャーって苦手です。

「えーと。では、これよりベアトリスの水の系統魔法の講義を始めます。」

「ん。」

そうして話しは始まり。

時折タバサさんから質問が入る内に。

「よい点に着目されましたね、ミス・タバサ。」

「ん。」

段々と話しに熱が入って行き。

「む？ 暗くなって来ましたね、ライト！」

何時しか時刻は夕刻へとなり夜となり深夜へとなり。

「くしゅん、くしゅん 寒う。」

何故、わたくしはベッドの上になんて眠っているのでしょうか？

それになんか頭がガンガンとして胸の辺りがムカムカとします。

もしやわたくしはお酒を飲んだのでしょうか？

おかしいですね。

アルコールに弱いのでめったな事ではお酒を口にしないのですが。

「ふわあ　ふわあ　くしゅん！　くしゅん！」

「冷たい。」

「は？」

い、今　確かに人の声が聞こえて。

だ、誰か部屋の中にいるのでしょうか？

「　　なにも見えませんね。」

月明かりが差し込む窓辺以外は室内が真っ暗で、これではなにもわかりません。

えくと、杖はどこに。

「いたたたたっ！」

身を起こそうとしたら誰かに髪の毛を引っ張られてしまいました。

誰ですか人のしっぽを掴んでいるのは？

あ、それより杖は杖はと あ、あつた！

「ライト！」

魔法の光りに照らし出されたのは。

わたくしの片方のしっぽを掴むどころか。

マフラー代わりに首に巻き付けているタバサさんの姿。

「なに、この状況は あっ！」

そうでしたそうでした思い出しました。

わたくしはタバサさんの部屋でタバサさん相手に魔法の講義をしていたのでした。

と、するとこの頭痛と胸のムカムカ感ほ。

む。記憶ありませんけど、どうやら喉が渴いてワインに手を出してしまっただけですね。

さて、気分も悪い事ですから自分の部屋に帰って休むとしますか。

「ミス・タバサ。

起き上がれないので髪の毛を放してくれませんか？」

「。。。」

「わたくしのしっぽはマフラーではありませんよ。」

「。。。」

「タバサさん、起きて。」

「。。。」

困りましたね、起きる気配ゼロです。

「くしゅん！」

くしゃみでハモってしまいました。

ここはタバサさんの為も無理矢理にでも起こすしかありませんか。

「タバ」お母さま。「え？」

お母さま？

「お母さまの髪の毛 いい匂いがする。」

そう言えばわたくしの使っているヘアコンディショナーはガリア産の。

もしや、タバサさんのお母さまもわたくしと同じのを使われているのでしょうか？

あ そうでした。

タバサさんのお母さまはジョセフさんにエルフの薬を飲まされて心を。

しかし、あの青いおっさんろくな事しませんね。

もし、ルイズに同じ事をしやがりましたら。

大国ガリアの王さまだろぅが関係ありません。

タンスの角に小指を思いつきりぶつける×100回の刑を味わわせた後に。

自分から殺してくれって口にするくらいの酷い目に遭わせて殺ってあげます。

「お母さま」。

このまま寝かせてあげたいですね。

でも、このままでは二人とも風邪を。

あ、そうだ。

「ん~~~~しよっど。」

タバサさんをもうちよっどとっち寄せてマントを重ねてギュッとすねば。

「温かい。」

これならお互いに風邪をひかなくて済みそうですね。

さて、わたくしの中の睡魔さんがお仕事を始めたようですし。

「せめて今だけは良い夢を見てくださいね。タバサさん。」

「ん。」

あれ？ 今、返事が まあ、いいです。

おやすみなさい、タバサさん。

12話 新しいお友達。(前書き)

なが〜いなが〜い眠りから覚めましたって、言うのは嘘です。

ただ、なにかと忙しかったただけなのです。

今回はちつとばかり長めなお話です。

男性読者にはサービスありかも？

っーか、毎日が寒いです。

まだ雪降ってませんけど寒いです。

あゝ〜食器洗いで手荒れの日々がまた来た〜。

12話 新しいお友達。

翌朝。

「起きて。」

「ん あと ごごじかん。」

「。。。」

「あいたっ！ えっ？ えっ？ 今のなに？」

突然頭に痛みが走り、驚いて目を覚ますと目に飛び込んで来たのは杖を手にしたタバサさんの姿でした。

「ミス・タバサ？ なんでわたくしの部屋に。。。」

「ここはわたしの部屋。」

「あ、昨日はここに泊まったんです。」

「ん。」

「とじろで。。。」

「なに？」

「頭が鈍器で撲られたように痛いんですけど、ミス・タバサ。なにかしませんでした?」

「 なにもしていない。」

「 そつですか?」

昨日ワインを飲んだから二日酔いになってもなったのでしょうか。

しかしそれにしても痛みが違つような気が ん?

「 。

どうしたんでしょう? そんなにジツと見詰められると照れるのですけど ハッ!

もしか顔に涎のあとでもあるとでも!

「 あなたに聞きたい事がある。」

あーやつぱり涎の えっ? 聞きたい事? 教えたい事ではなく?

「何故、知っているの？」

「は？」

「何故、わたしの名前を知っているの？」

「あの意味がまったくわからないんですけど。」

「あなたは昨日わたしの事をシャルロットと呼んだ。」

「へ。」

「何故あなたがその名前を知っている？」

ま まさかあの時タバサさん意識あつたんですか！

「答えて。」

うっ 室内の気温が下がったような感じがしました。

「言えない理由でもあるの。」

言えないと言うか言っても信じてもらえないので言えないのですよ

。

「そう。」

おや？ 諦めてくれ え？ な、なんで杖をこちらに向けるのですか？

ま、まさかやる気、いえ、殺る気ですか！ い、いや、まさか。

でも 万が一と言う事が あわわわわわ

え〜と、え〜と。 なにかよい方法と言うか言い訳と言うか上手くい
まかす方法は。

あ、そうだ！

「あ、あのですね。 わたくしのお父さまクルデンホルフ大公なので
すけど、すごい過保護なのですよ。」

「。。。」

「それでわたくしがここに留学するにあたり、うちのお父さまなに
をされたと思われれます？」

「。。」

「なんと学院に勤める教師や在学生の事を事細かく調べたのですよ。

それでミス・タバサの事も。」

「知ったと?」

「まあ、そう言う事になります。」

「どこまで。」

「は?」

「どこまで知っているの。」

「これ、タバサさんの事と言う意味に捉えて回答していいのですよね?」

「え、え〜と、ほぼ全てを。」

「。。」

「。。」

「。。」

やっぱり通用しませんよね。

「わかった。」

「ふえ？」

「あなたを信じる。」

「マジですか！ やったー！ 助かったー！」

「もう、ふたつだけ尋ねたい。」

「ま、まだわたくしになにか疑念を？」

「は、はい、なんででしょうか？」

「わたしと出会ったのは 偶然？」

「え？ ええ、まったくの偶然ですけど？」

「そう。」

ん？ タバサさんの表情が幾分和らいだような気が。

しかし今の偶然とはいったいどう言う意味で あっ、なるほど。

手駒にしようとして下心ありで近付いて来たのかと思われたのですか。

たしかに対ガリアを目論む国からすればタバサさんの価値はかなり高いですからね。

「最後に。」

「あ、はい。」

「。」

ん？ どうもそれたのぢょじょ？

「昨日のは。」

昨日？

「あれは何故したの？」

あれ？ あれとはなんでしょ？

「あの、ミス・タバサ。あれ、だけではわからないのですが。」

「お母さま。」

「お母さま？」

「お母さまのようにわたしをあやしてくれた事。」

あゝそれですか。

「答えて。」

「あ、はい。え〜とあの、言いづらいんですけど。」

ミス・タバサのお母さまは ほら、あの その ミス・タバサの事を。」

本人を前に人形だなんて言えないです。

「 続けて。」

「あ、はい。えっと、それでミス・タバサが可哀相で。」

それに、お母さま、ってしがみつかれてわたくしの母性本能にきゅんっと来たと言いますか。」

「。。。」

「もしかして 余計な事でしたでしょうか？」

「嫌じゃない。」

「え？」

「また して欲しい。」

「は？ え、ええ、なんなら今してあげますけど？」

ハグくらいいくらでもしてあげますよ。

「。。。」

「遠慮なさらずに、さあ、どうぞ。」

こっちおいでです。

「。。。」

「そんな遠慮なさらずに、さあ。」

「ん。」

おそろおそろって、なんか人なれしていない子猫みたいですね。

「やっぱりいい。」

あゝもう、じれったいですね。いいからこっちへいいます。

「あっ。」

ありゃ？ 手を掴んで引つ張ったら後ろ向きにハグする格好になっ
てしまいましたけど。

まあ、ハグには変わりませんからいいですよね。

とりあえず、捕まえた〜です。

ほら頭をナデナデしてあげるからジタバタとしないでくださいね
〜。

「ん。」

おっ？ 急に大人くなりましたね？

どうやらタバサさんは髪の毛をナデナデされるのがお好きみたいですねえ。

もしやタバサさんのお母さまもこうやってナデナデしてあげていたのでしょうかね？

それにしてもタバサさんはほんとにちっこいと言っか華奢ですねえ。

あんな食べるのにどこに栄養が回っているのでしょうか？

まさかどっか悪いとかじゃないですよね？

むっちょっとチェックしてみましようか。

え〜と。手足は うわ〜細いですね〜。

ウエストは 細っ！ めっちゃ細っ！

お尻は ちっちゃー！ て言うか脂肪少なすぎです！

これは固いところに直に座る時に気をつけないとへたすりゃ骨痛めますよ。

残るは まあ、見ただけでもわかりますけどやっぱり気になるのですよねえ。

え〜い！

「んっ。」

本気でごめんなさいタバサさん。

わたくし 今、あなたのおっぱい触って優越感に浸ってしまいました。

それにしても。

こんな年端も行かぬ子供にあの青ヒゲと来たら。

いえ、青ヒゲ親子と来たらなんて仕打ちをしやがるんでしょう。

タバサさんがあんたらになにをしたと言っているのですか？

ジョゼフさん。あなたシャルルさん殺したんですからもう気が済んだでしょう。

イザベラさん。あなたタバサさんに嫉妬して八つ当たりする暇あるなら烈風にでも弟子入りしなさい。

つーか、お前らメンタル弱すぎ！

仮にも一国の王と王女が揃いも揃ってなにやってんだ！ です。

あゝだんだんと腹が立って来たと言っかムカついて来たと言っか、あの親子め！

「お母さま。」

ん？ わたくしの手に水滴が もしやタバサさん泣いて。

決めた わたくし決めました。

わたくし タバサさんを救う事に決めました！

ふふふ、見てなさいよ青ヒゲ親子。

お前ら絶えく対にタバサさん親子の前で土下座させてやるんだから！

「いつ、痛い！」

「え？ あっ、ごめんなさい。」

つい、手に力が入ってタバサさんのおっぱい握りしめてしまいました。

「ほんとにごめんなさい。痛かったですよね。」

「ん。」

お詫びに二こもナデナデさせていただきます。

痛い痛い飛んでけ〜どつせならあの親子目掛けて飛んでけ〜
ーか飛べ!

「んっ んんっ あっ。」

ん? この声 もしやタバサさん感じ コホンコホン、なんで
もないです。

と、とりあえずこれ以上はなにかとまずくなりそうなのでやめてお
きましようか。

え、えっと、タバサさんを救うと決めはしましたけど、やはり本人
意思は大事です。

「あの〜ミス・タバサ。わたくしからも尋ねたい事があるのですけ
ど。」

「はあ はあ ん?」

「あの 申し訳ありませんが、こちらを向かないでいただけ
ませんか。」

とろ〜ん、とした目でこちらを振り返って見られると、なにかこつ。

とつてもイケない事をしてしまった罪悪感と言いますか。

越えては行けない線を越えそうと言いますか。

とりあえずお互いの安全の為にこっち見ないで欲しいのです。

「ん、わかった。」

助かります では、改めてまして。

「え」と、それですね。わたくし ミス・タバサを救いたいです。

「

え？」

だから振り向いたダメですってば おや？

目つきが先程と変わってますね？

わたくしそんな意外な事言いましたでしょうか？

「ご存知かと思えますけど、わたくしこう見えても魔法には自信があるのですよ。」

「。。。」

「わたくしにあなたを救わせて、いえ、あなたが幸せになるお手伝いをさせていただけませんか？」

「。。。」

「あ、もちろん下心なんてありませんからね。」

「。。。」

「だめでしょうか？」

「なぜ。」

「え？」

「何故あなたはわたしを救う、と。」

「ん、正直言うと自分でもよくわかりません。」

「。。。」

これ、別に惚けてる訳じゃないのですよ。

だっていくらタバサさんが可哀相でジョゼフさん達にムカついたって言っても。

相手にするのはハルケギニア1の大国の王であり。

ハルケギニア1の頭脳の持ち主と言っても過言ではない狂王ジョゼフさんと。

それに従うは主を盲愛する伝説の使い魔、ミヨズニトニルンことシエフィールドさん。

あと他にもいろいろといますけど。

それらを相手にするんですからただの同情から来るものではないと思うのですよ。

ほんと、自分の事ながらなんでなのでしょうね？

まあ、自分の全てがわかる人間なんていやしないでしょーし。

わからないものをいくら考えても時間の無駄ですね。

さて、なんて上手く言ったものでしょうか。

あ、そうだ！

ここはイーヴァルデイの勇者みたく格好よく。

『囚われの姫君を救うのに理由などいりません。』

わたくしのキャラじゃありませんね。

それにイーヴァルデイ役は才人さんじゃないと ん？

そういや才人さん。イーヴァルデイの勇者みたくタバサさんを救出して。

タバサさんフラグを決定的なものにしゃがったんでしたよね？

む、ここはルイズの為にもそのフラグをへし折っておきましょうか。

しかしどつちってへし折れば。

「。。」

おっと、とりあえずはまず先にタバサさんにお答えしないといけませんね。

えーと。ここはやはりベストよりベターかつシンプルに行きますか。

「たぶん、わたくしはミス・タバサの事が好きなんですよ。」

「好き？」

「ええ。わたくし嫌いな人間を救いたいと思う程出来た人間じゃありませんもん。」

「ここ、笑うところですけど。」

「。。」

あら 全然ウケませんでしたか。

「本当に。」

「はい？」

「本当に わたしを助けてくれるの？」

「ええ。このベアトリス・イヴオンヌ・フォン・クルデンホルフの名に誓って。」

「必ずやあなたをお救いして差し上げます。」

「ありがとうございます。」

「あ、でも。」

「？」

「わたくし女ですのでミス・タバサのご希望に沿えないですけど別に構いませんよね？」

「わたしの希望？」

「惚けたってネタは上がっているのですよ。」

「イーヴァルディの勇者みたいな格好いい殿方に救われたい。」

「なっ 何故それを。」

わくタバサさんの顔が真っ赤になってしまいました。

なんかこういうタバサさんも新鮮でいいですね。

「ふっふっふっ。わたくしはミス・タバサの事ならなんでもわかりますよ。」

「う。」

まあ、原作に描かれていた事ならばですけどね。

「ミス・タバサ。」

「？」

「絶対にわたくしが幸せにしてあげますね。」

「ん。ありがとう。」

あら？ 先程より顔が赤くなったような気が？

そんなきつくハグしてないんですけど？

「あ、そうだ、ミス・タバサ。わたくしとお友達になりませんか？」

「お友達？」

「はい。お友達です。」

「別に構わない。」

「やった〜！これで人生二人目のお友達ゲットです！」

「二人目？」

「ええ。一人目はルイズで二人目がミス・タバサです。」

「わたしと同じ。」

「へ？」

「わたしもあなたが二人目。」

あれ？ 確か吸血鬼の女の子が。

この世界ではあの物語はなかったのでしょうか？ それかまだ始まる前とか？

でも、確かあの吸血鬼の女の子は最後にタバサさんに。

「どうしたの？」

「あ、いや、なんでもありません。そうですか、ミス・タバサもわたしで二人目でしたか。」

「触れちゃいけない事ってありますからね。」

「ん。一人目はキュルケ、二人目があなた。」

「あ、わたくしの事はベアトリスと呼び捨てにしていたいただいて結構ですよ。」

「ベアトリス。」

「ええ。」

「わかった。では、わたしの事はシャルロットと呼んで欲しい。」

「は？ シャルロット？ タバサじゃなくて？」

「あ、あの～その名前はバレたら結構まずくないですか？」

「二人だけの時。」

あゝそういう事ですか。

「では、普段はタバサと？」

「ん。それでいい。」

「わかりました。では、これからよろしくお願いしますね、シャルロット。」

「ん。こちらこそよろしく、ベアトリス。」

と、わたくしがタバサ交友を結んだ時でした。

突然ドカーンと言う音を立ててドアが吹き飛び。

「助けに来たわよベアトリス！って、あああんなら、ななななにやっっているのよー！」

と、部屋に飛び込んで来たのはルイズでした。

しかし助けにはいったい？　もしや、わたくしがタバサに攫われたとでも？

あっ、そ、それより早くタバサを逃がさないと。

こ、このままだと絶対ルイズがタバサに襲い掛かかって。

うう 虚無の担い手と雪風の戦いですか そ、想像しただけで恐ろ
しや。

ハッ！ ルイズの魔力が膨れ上がって行って。

は、早くタバサを逃がさないと！

「タバサ！ あなたの使い魔は今どこにありますか？」

「外。」

「呼べばすぐに来ますか？」

「ん。」

「では、即呼んで そうですね、ミス・ツエルプスターの部屋にでも行ってください。」

と、こゝは小声で。

「ベアトリスは？」

「わたくしは少しルイズとお話がありまして。」

ほんとは一緒に逃げ出したいですよ。でも、それやると火に油を注ぐ結果になり。

とてもまずいと言うよりヤバい事になりそうなので出来ないのです。

「。。。」

「タバサ。お友達になったばかりですけど、わたくしのお願いを聞いていただけますか？」

「ん。わかった。」

「いい子ですね、タバサは。」

「ん。」

「では、また後ほどお会いしましょうね。」

「。。。」

「ん？ ハグがそんな気に入りましたか？」

「ん。」

「また今度やってあげますね。」

「ん。」

「では、急いで行ってください。」

「わかった。」

と、タバサが窓の方へと動き出した時。

「逃がすものですか！ このお泥棒ねこがあーっ！っ！」

「ル、ルイズ、落ち着いてください！」

「これが落ち着いていられるかってえーっ！の！」

「待ちなさいタバサアアアア！」

と、ルイズがタバサ目掛けて駆け出したので、すかさずわたくしは

「くっ！ このっ！ 放しなさいベアトリス！」

ルイズの身体に抱き着くようにして前進を防ごうとしたのですけれど。

くっ！　なんで公爵家の息女がこんなバカ力を持っているんですか！

わ、わたくしの力では持つてあと、くっ　数秒。

タ、タバサはもう脱出しましたか！

チラリと後ろを振り向くと、窓の外にはシルフィードさんに乗ったタバサの姿が。

しかし。

なにやってんですかタバサ！　こっちなんて見なくていいから早く行ってください！

「。」「

タバサーーー！

「ん。」

願いが通じたのか、タバサは窓から放れて行きました。

「ふう 行ってくれましたか。」

と、わたくしが安堵した時。

「逃がすかぁーっ！」

ルイズがわたくしの腕を振り切り窓辺に立つと。

「ちょ、ちよっとルイズ！ 杖を掲げてなににする気ですか！」

「泥棒ねこは、殺る！」

「バ、バカな事はしないでください！」

「バカとはなによバカとは！ これはあんたをあの泥棒ねこから護る為に必要な事なのよ！」

ダメだ 完全に目がイッちゃってる。

しかしまさかここまでルイズがわたくしの事を好い 依存？ 盲愛？ 家族愛？

まあ、どれかよくわかりませんが、とりあえずルイズを止めなければ。

しかしどんな手で。

まさか魔法を使う訳にも行きませんし。

そもそも先程の爆発の余波でわたくしの杖の行方がわからないのです。

ここはやはり いや、でも。

「うがー！ ベアトリス！ 放しなさいーい！」

くっ、タバサは まだルイズの射程距離内に。

こうなったら致し方ありません！ セカンドもルイズにくれてやる
です！

「ルイズ！ こつちを向きなさい！」

「なによ！ 今忙しい、むぐう
あゝ。」 「ふはあ。」 「ふにや
あゝ。」

「ふう 落ち着きましたか？」

「にやあゝ。」

「そうですね とりあえず、一度ルイズの部屋に行ってゆっくりと
話し合いませんか？」

「にやゝ。」

「では、あ、ちょっと、抱き着かれると歩きづらいですって。」

「にやあにやあゝ。」

「 やりすぎましたかね。」

こうして新しく出来たお友達の命を護る為にルイズにセカンドキス
まで捧げてしまったわたくしでした。

っーか！

「才人さん！ なにドアの陰からこっちをこそこそ見てんですか！」

「やべっ、バレた。」

「バレたじゃないですよ！ 日頃の恩義返せとは言いませんが、こんな時は助けるのが男と　　ん？」

才人さん、なんか才人さん以外の気配がそこからするのですけど？」

「まあ、あんだけでかい音したからな。」

え？ ま　まさか。

「あら、もう終わり？」

「えゝもつと続き見たかったのに。」

「あのふたり　怪しいとは思っていたけどやっぱりね。」

「ええ。最初からそんな感じだったものね。」

「ねえ。これからあの三人どうなるのかしらね？」

「うゝん。」

「ああ、禁断の恋って憧れるわ。」

「あら。じゃあ、あなたあっちに行ったら？」

「ん〜。死にたくないからやめとくわ。」

モ、モンモランシーさんに 名前も知らないみなさん方。

まさか まさか。

「さ、さささ才人さん みなさんと、どとどこら辺から見えました？」

「え？ あ、いや、その。」

「えええ遠慮なさらずに言ってくださいませんか。」

「んじゃあ言うけど、ルイズがドアを吹き飛ばしてすぐかな。」

い、一部始終見られてたって事ですか。

「それにしても濃厚なキスだったわね〜。」

「見なさいよ、あのルイズの顔。」

「ぼつとしちゃって、あれ、意識飛んでるんじゃない？」

「これからルイズの部屋に行くらしいけど、なにをする気がしらね
「？」

「え〜わかってて言わせる気〜？」

さ、最悪だ。

こいつら完全にわたくし達の事をアレな関係だと思ってやがります
。

こ、このままでと このままでと。

へたすりゃハルケギニア中にわたくし達の事が広まったりして。

「お、おい。急にガタガタと震え出したりしてどうしたんだよ？」

「いやだぁーっ！」

「おわっ！」

「わたくし違いますからー！ アレとは違いますからー！」

「泣かないでベアトリス。」

「え？ あ、ちょ、ちょっとルイズ。人の顔を掴んでなにを、ん！
んんっー！ んー！

ぶはあ！ はあ、はあ、い、いきなりなにをするんですかルイズ！」

「なについて、キスだけど？」

「はあ？」

「さっきのお・か・え・し。」

「こ、今度は違う意味でイッてしまつて。」

「可愛いわ〜わたしのベアトリス。」

「ま、またキスする気ですか！ しょ、正気に戻ってくださいルイズ！」

ん？ キス？ ハッ ファースト、セカンドに続いてサードキスの相手もルイズって。

「うう もう もう お嫁に行けないー！ うわぁー！

「あら、そんな心配しなくてもわたくしがもらってあげるから大丈夫

よ。
「

「ぐすっ　ぐすっ　それ、ほんとですか？　って、それはいやあー
！　うわあー！　ん！」

この日。新しく出来たお友達と引き換えにいろいろなものを失った
わたくしでした。

13話 水の王国の首都、前編。(前書き)

みなさま、トリスタニアって言ったら？

シーン。

ノリ悪いっすよ、みなさま。

って冗談はさておき。

今回はベアトリスがあのおの3人とトリスタニアにお出かけいたします。

あ、いや、未満かな？

13話 水の王国の首都、前編。

お泊り騒動から数日後の虚無の曜日朝。

この日はタバサ救出計画の第一歩として、夜にとある人物との接触を試みようとして計画していたのですが。

「トリスタニアにお買い物？」

「そつ、だから早く用意なさい。」

「ふえ？」

「あなたも一緒に行くのよ。当然でしょ？」

「と、当然って。」

「あら？ まさかこのルイズお姉様とお出かけするのが嫌だとも？」

「い、嫌とは言いませんけど。」

わたくしだって女の子ですもん、お友達と一緒に買い物に行くのは嬉しいです。

でも、今日はちょっと間の悪いと言いますか。

今の内に寝だめしておかないと肝心な時に眠くなって来そうです。

「ら、来週「ダメよ。」。

ルイズですもんね。

たしかトリスタニアはここから馬に乗って数時間の距離だったはずですよ。

そうすると。

買い物をしてごはんを食べてまた買い物してとなると帰りは早く夕方。

そして夜にとある人物との接触となると うん、きつい。

でも、ルイズの中ではわたくしとトリスタニアに一緒に行くのは既に確定済み。

ん？ この時期にルイズがトリスタニアに あっ、デルフリンガーさんイベントだ！

そうなるとトリスタニアには才人さん？ ん？ どこにも才人さんの姿が見えませんか？

「ねえルイズ。才人さんの姿が見えませんが、馬の用意でも頼んだのですか？」

「サイト？ あいつになら暇を与えたわよ。」

「ひ、暇あー！」

か、かかか解雇って ガ、ガンダールヴを解雇するって。

ハッ！ こ、こうしてはられない！

早く連れ戻してルイズとの間を執り成してあげないと！

「そうよ。今日は虚無の曜日だからあいつにも暇を与えたの。」

あ、暇って、その暇だったんですか。

「それにしても失礼しちゃうわよね。」

「は？」

「今日は自由にしていいわよって言ったなら、あいつなんて言ったと思っ？」

「さ、さあ？」

「ヒヤッホー自由だー今日はハメを外すぞ、こんちくしょー！と
か。」

それはもう嬉しそうに叫びながらどっかに駆け出して言ったのよ。」

「あんのぉ おバカ。」

突然知らない世界に連れて来られた上に使い魔にされたんですから。

才人さんの気持ちもわからなくはないです。

でも、そんな露骨に喜んじゃ、自分はルイズに不平不満がありありです、って言ってるのと同じじゃないですか。

「やっぱりもう少し厳しく躾るべきだったわね。」

はい。今回の才人さんの発言を聞いてわたくしも同意いたします。

「これからはもっと強くビシバシと鞭で叩かなきゃ。」

はい。わたくしも 鞭？

「ルイズ 才人さんに鞭を使ってるんですか？」

「そんなの当然じゃない。あいつが言う事聞かない時はこうやってビシバシって あつ。」

この女 わたくしとの約束を破って密かにやってやがりましたね。

しかもあの手首のスナップのキレを見るに常習犯。

はあ ルイズの為にも今一度釘を刺しておきますか。

「ルイズ わたくし以前に言いましたよね？」

「あつあつあつ。」

「自分の使い魔、いえ、人を鞭で叩くの禁止と言いましたよね？」

「あ、あああいつが悪いのよ わわわ私の言う事を聞かないんだもん わわわ私は悪くないわ。」

ほほう 開き直りましたか。

「わたくし 人を人とも思わない行いをする人は 大っ嫌いと言いましたよね?」

「あああいつは平民よ、べ、べべ別に鞭で叩いたっていいじゃない!」

「わたくし 人種や身分差別する人は 大っ嫌いとも言いましたよね?」

「べ、べべアトリス。」

「わたくし このままだとルイズの事 大っ嫌いになりそうですわ。」

「それはだめ!」

「ルイズ わたくしあなたの事が「もうしないから!」ほほう?」

「もうしない! もうあいつを鞭で叩いたりしないから嫌いにならないで!」

「。。。」

「ほんとよ！ 二度と約束破らない！」

「ルイズ。」

「は、はい！」

「わたくしが才人さんに用意してあげたベッド。

これも才人さんに使わせないで床に藁をひいて寝かせてるなんてしてないでしょうね？」

「そ、そそんな事してないわよ。」

目を逸らしましたね。

「ルイズ 正直に言わないと。」

「していないわ！ 考えた事はあったけどしていないわ！ ほんとよ！」

「ほんとですね？」

「ほんとよ！ だから だから お願いだから グスッ グスッ 嫌いにならないで ベアトリス。」

「嫌いになりませんよ。」

「えっ。」

「ルイズを信じます。」

「ほんと?」

「ええ。」

「ふ ふえ ふえーん!」

「あ、ちょ、ちょっと! 抱き着くなら涙を拭いて まあ、いつか。」

「ふえくん、ベアトリス。」

「ネ、ネグリジエでグシグシと涙拭くのはやめ タバサ?」

「ヒック ヒック タバサ?」

はい。なんかえらく怖い目をしたタバサが部屋の入口のところに立っているんですけど。

「あつ、タバサ! あなたなに覗いてんのよ!」

「 覗いていない。」

「覗いてるじゃない!」

「違つ、堂々と見てる。」

「くっ、屁理屈を！」

「屁理屈じゃない、事実。」

まあ、そうですけど。

「ム、ム力つく女ね、あんた！」

「あなた程ではない。」

あ、あの、タバサ ルイズにそんな事言ったら。

「な、なんですってー！」

ほら、キレちゃった。

「あなた、うるさい。」

「うっ、うるさいですってー！ あんた誰に向かって言ってると思
ってるのよー！」

「朝から近所迷惑なあなた。」

「 そう、喧嘩売ってんのね あんた。」

あつ、ル、ルイズの雰囲気だ。

「 やつと気づいた、鈍い。」

な、なんでそんな挑発的なんですかタバサ。

「 いいわ 買ってやるうじやないのその喧嘩。」

「 ん。」

えっ？ えっ？ ちょ、ちょっとお二人さん。

「 あんたとは決着を付けないといけないと思ってたから手間が省けたは。」

「 それはこっちのセリフ。」

「 泥棒ネコめ！」

「 ばーさんは用済み！」

あれ？　どっかで聞いたセリフですね？　って、まてまてまてー！

「ちょっと待ったー！　お二人とも少し冷静になってください！」

「あら？　私は冷静よ。」

「ん。」

「嘘つけー！　明らかに今にも爆発しそっだわー！」

「そんな事ないわよ、ねえタバサ？」

「ん。」

と、とりあえず話題を変えて。

「え、えーと、そういえばタバサは何故わたくしの部屋に？」

「ん。」

「あれ？　この本は昨日わたくしが貸した本ですよね？」

「返しに来た。」

「えっ？　もう読み終わったのですか？」

「ん。」

「タバサも早いですね。」

「ん。」

「それじゃあ次のお貸しいたしますね。どんなのがよいですか？」

「任せる。」

「お任せですか？ それは責任重大ですね。」

「あなたなら大丈夫。」

「あらあら、それはまた過分な評価をしていただいて。」

「なんか照れますね。」

「ん。」

「えへへ。」

「ちょっとあんだ達！」

「急に大きな声を出してどうしたんですかルイズ？」

「なに二人していい雰囲気つくってんのよ!」

「そんな事してませんよ。ねえタバサ?」

「ん。」

「あーもうーまた! ほら! さっさと出かけるわよ!」

「あつ、ちょっと、わたくしまだ行くとは!」

「だめ! 行くの!」

「行くとしてもこの格好じゃ無理に決まっていますから!」

まだ寝巻き姿ですよわたくし。

それもルイズからこれを着なさいって渡された結構スケツスケツの。

「どこか行くの?」

「え? いや、ルイズと一緒にトリスタニアに行こうって。」

「。。」

「タバサ?」

「私も行く。」

「はあ？」

「私もあなたと一緒に行く。」

「えっ、あの、わたくしまだ行くとは。」

「だめなの？」

う、涙目上目遣い！

うう 母性本能がぎゅーっと締め付けられるんですけど。

「ベアトリス あんたなにタバサを抱きしめてんの。」

「えっ？」

ハッ！ い、いつの間に。

「お母様。」

くぅぅタバサ可愛すぎです。

「ベアトリス。」

「あつ、は、はい。」

「もう おしまいなの？」

そんな顔をしないでくださいタバサ。

わたくしも名残惜しいですけどこれ以上やると、あなたまたシルフィードさんで窓から逃げ シルフィードさん？

あつ、そうだ！

どうせこのままではルイズに無理矢理にでも街まで連れて行かれるのですから。

夜の為にせめてその行程を短縮せねば。

「ねえタバサ。トリスタリアに行くのにシルフィードさんを出していただいても構いませんか？」

「ん。構わない。」

「ちょ、ちょっとベアトリス。まさかタバサも連れて行くって言

うんじゃないでしょうねー!」

「ルイズ。シルフィードさんなら街までひとつ飛びですよ。」

「それがどうしたのよ?」

「街までの往復にどれ程時間がかかると思いますか?」

「あっ。」「

シルフィードさんの利便性に気づいたようですな。

「でも。」「

さあ、とどめです。

「わたくし。ルイズお姉様とゆっくりお買い物をしたいな。」

「わ、わかったわよ。タバサ、あんたも連れて行ってあげるわ。」

「礼は言わない。」

「なんですって!」

ああ、また。

「はいはいはい、これから一緒にお出かけする仲間なんですから争いはやめましょうね。」

「命拾いしたわねタバサ。」

「あなたこそ。」

この二人、なんでこんな仲悪いんですか？

原作ではこんな仲悪くなかったはずですよ？

この二人が争うシーンって言ったら才人さんをもしや。

わたくし原作の才人さんポジションにいる？

あ、あははは まさかねえ。

あ、でも、いろいろと心当たりが。

「なによその目やる気？」

「。」「

おっと、今はそれどころじゃありませんね。

「あの、着替えるので」「いいわよ、手伝ってあげるわ!」「ん。」「

部屋の外に出て欲しいって言おうとしたんですけど。

そうしていざ出発の時刻となり、わたくし達は学院の中庭へと。

「わあ〜間近で見ると大きいですね〜。こんにちはシルフィードさん。」「

「きゅいきゅい〜。」「

「ふ、ふん。大した事ないわね。」「

「またルイズはそういう事言わないの。」「

「負け「タバサ!」「。」「

「ん? 今なにか聞き捨てならない事言おうとしなかった?」「

「い、いいえ。タバサはなにも言ってますよ。ねえタバサ?」「

タバサーお願いですから空気を読んで。

「ん。」

くださいましたか ほっ。

それにしても。

「相変わらずヴァリエールは怒りっぱいわねえ。そんなのだから素敵な殿方が寄って来ないのよ。」

「なんですってー！ ツエルプストー！」

なんでキュルケさんまでいるのでしょうか？

「ねえタバサ。ミス・ツエルプストーは「あら？ キュルケでいいわよ。」あ、はい。」

小声なのによく聞こえましたね。

「あの〜キュルケさんは街に剣でも買いに行くんですか？」

「剣？ 変な事聞くわね？ そんなもの買わないわよ。」

「そうですね。」

わたくしが決闘イベントを潰したせいでキュルケさんは才人さんに微熱ってませんもんね。

では、何故わたくし達に着いて来るのでしょうか？

「ねえタバサ。私に似合う下着が無くなっちゃうかも知れないから早く行きましようよ。」

あゝなるほど、それ着てまたどっかの誰かを誘惑しようって事ですか。

でも、火遊びは程々にしておかないといつか痛い目にあってしまうですよキュルケさん。

しかしこのメンツで大丈夫なんでしょうかねえ。

ん？ 才人さんですか？

才人さんはどこを探しても全然見つからないので置いていきます。

あ、デルフリンガーさんは仕方ないのでわたくしが代わりに買って来てあげます。

まったく大事な相棒イベントなのにどこをほつつきまわっているんだか。

て言うか主のルイズをほつたらかして遊び回るって、使い魔としての自覚が足りなすぎですあのバカ犬。

バカ犬。この呼び方ちょっと癖になりそうかも。

帰って来たら、わたくしの言う事が聞けないと言っているのですか、こここのバカ犬ーっ！　なんてやってみようかな。

ハッ！　わたくしっしたら今なにを！

「ねえ、ベアトリス。」

「ひゃ、ひゃいー！」

「なんて声出すのよ。」

「あ、ルイズ どうしたのですか？」

「どうしたもこうしたも出発するわよ。」

「え？」

あ、タバサもキュルケさんも既にシルフィードさんに乗って。

「さあ、行きましょう。」

「そ、そうですね。行きましょうか。」

そうしてわたくし達4人はシルフィードさんの背に乗り。

一路トリスタリアへと向かったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1826x/>

ふたつのしっぽは長くキラキラと。

2011年12月4日01時54分発行